

404小隊(チビ)は現実へと現れる【完結】

畑渚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ってのはまあ普通の大学生って言っていていい生活を送っていたんだが、

夏休みの初日によくわからないことになってな

今年の夏休みは、一味違ったものになりそうな予感がするぜ……胃薬を用意しておこう

pixivにも同名で連載しています。

目次

第一話	夢の始まり	1
第二話	もう逃げられないゾ♡	6
第三話	夢が覚めるまで	11
第四話	誰だろう？答えはわかっているけれど	15
第五話	お買い物	20
第六話	どうしてこうなったんだっけ!?	25
第七話	まあ、そうだよね!	30
第八話	残念だが、俺にも無理だ	35
第九話	目標目前！突撃い！	39
第十話	特別編 本当に……？	46
第十一話	これが布団の力	51
第十二話	俺の勝ち（プルプル）	55
第十三話	想像通りだ	60
第十四話	こっちを見るその目は何？	65
第十五話	容量よ、持ってくれ	69
第十六話	あと数本手があったらなあ	74
第十七話	俺が起きとかないとな……	78
第十八話	こんなに広かったかな	83
第十九話	無意識って怖い	87
第二十話	特別編 別に惚れたってわけじゃないんだからね	92
第二一話	こりや長引きそうだ	105
第二二話	我慢も身体に毒	109
第二三話	やわらか低反発枕	113
第二四話	転ばぬ先の	117

第25話	寿司食いてえ	122
第26話	泳ぐ寿司	126
第27話	ありがとう	130
第28話	早めのおやすみ	134
第29話	知らないもの	138
第30話	特別編 まったく……	142

第一話 夢の始まり

なぜそう思ったかはわからない。

ただそう……なんとなく公園に行こうと思ったのが発端だった。

だがどうして……

どうして俺の隣に子供が？

「ねえねえおじさん！これってどう遊ぶの!？」

右手の方には俺のスマホでゲームをする明るい茶髪の女の子がいる。無邪気な笑顔でゲームをプレイする様子は、あたりを通る諸兄弟たちまでを笑顔にする。

左手の方には暗めの茶髪の女の子が、うさぎの人形を抱えて静かに座っている。あたりを通る諸兄弟はその少女に庇護欲すら抱いていく。

そして、その諸兄弟たちはなぜこんなやつが少女を2人侍らせているのだろうと疑問の表情を俺に向けてくる。

声を大にして言いたい。なぜこうなったかを一番疑問に抱いているのは俺自身だと……

※※※※※※※※

俺の今年の夏休み初日は、珍しく何も予定がなかったはずだった。バイトはもちろん、友人や家族との約束も入れていなかった。昨夜は1人で宴をして、呑んだくれたあとがまだ残っている。

冷房もガンガンにかけて気持ちよく寝ていたところ、インターホンの爆音が俺の耳に刺さる。

「なんだ……荷物なんて頼んでないぞ?」

訝しみながらモニターの前に行くと、そこには訪問者の姿が映し出されている。

「……なんだ、間違いか」

そこには2人の幼女が背を伸ばしてカメラを覗き込んでいた。

「はあ……ついてないなあ。寝なおそう」

横になれば、眠気はすぐにやってくる。意識はすぐに薄れていった。

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン

ピンポーン……

||*||*||*||*||

目を覚ませば、昼をすぎていた。とりあえず起き上がって背伸びをする。なにやら途中眠りを妨げる何かがあった気もするが、きつと気の所為だろう。

「げっ何もねえ」

冷蔵庫を開けても、本当になにもない。少ししか使っていない調味料が端の方でひっそり自己主張しているくらいである。

「しようがない、どこかに買いに行くか……」

とりあえず適当なズボンとTシャツを着て、顔を冷水で流してから外へとでる。

「あつつ……」

昨日の雨のせいかな、やたらと湿度が高い。せつかくの晴天をすべて台無しにしている。

とりあえず、近くのスーパーまで歩いていくことにした。

「いらつしやいませ〜」

やる気のない店員の声が俺を癒やす。褒められた態度でないだろうが、俺はこのくらいが好きだ。適当にカゴにポンポンと商品をいれ、レジへと通す。

「ありがとうございます〜」

「はい、どうも」

支払いを終えて、商品をうけとる。外に出れば、またもや灼熱の世界だ。

「まったく……どうしてこんなに暑いんだ……」

温暖化だとかそんなもんじゃ断じてない。ただただ、この日、この地域が暑いだけだ。

「汗がうぎつたいな……」

確かちようどすぐ側に公園があつたはずだ。木陰で休憩していいう。

||*||*||*||*||

近くの自販機でスポドリを買って喉に流し込む。やっぱりこういう日には冷えたスポドリが一番だ。炭酸つていうのも理解はできるが、俺はこっち派だ。

ベンチに座り込み、スマホを取り出す。通知欄からゲームを起動させ、いつもどおりに操作する。

『ドールズフロントライン』

それがこのゲームの名前だ。一年と少しくらい前だったか……、サービス開始の広告を見て飛びついたものだ。

『おはよう指揮官！今日もなにかあつたら言つてよね！』

設定されたキャラが、設定されたボイスを話すだけだ。それでもなんとなく気分はいい。副官をなんどもタップする。

『何をするんですか指揮官！まだそういう関係じゃないでしょう！』

この言葉になんと顔を緩めただろうか。さすがに今は外だから表

情は変えないが、心の中ではニンマリと笑顔になる。

「ねえ、今日は何を食べるの?」

ん?そんなボイスが実装されていた覚えはない。そもそも支離滅裂だし、副官はホーム画面のボイスでは全部『指揮官!』と俺のことを呼ぶ。だがしかし、俺が推しの声を聞き間違えるはずがない……。

他のやつが別のゲームでもやっているのかと顔をあげると、笑顔でスーパーの袋を覗いている少女が目に入る。その声は先程聞いていたものと同じだ。百人に聞いて百人が同一人物だと答えるはずだ。

そしてその容姿は……今の俺のゲーム画面からはかけ離れていた。小さい背丈、子供服、柴犬のお面、俺の副官の重苦しい装備はそこにはない。

しかし、それは見覚えがある。たしか中国版で実装された子供の日スキンとやらで、それと寸分違わぬ容姿を、俺の推しはすることになる。

「ちよつと9、走って行かないでよ……」

「45姉ごめん!でも我慢できなくて」

エへへと9は笑う。それにくらべ45は拗ねているのかほっぺを膨らましている。

「えつと……君たちは?」

「あれ?ああそっか、自己紹介してなかったね。私はUMP9!」

「私はUMP45」

「ちよつと君たち、どこで見たのか知らないけどお兄さんをからかっているのか?」

本気で自分が心配になってきた。話しかけてきた幼女が推しの姉妹に見えるだとか白昼夢にもほどがある。早くも熱中症になったのかも知れない……。

「あー信じてない!」

「ひどい……うう」

「ああ待って!泣かないでくれ!ほら!えつと……」

45の瞳が潤んでいく。さすがにそれなりに人通りのあるこの公園で幼女を泣かせたと鳴っては、嫌な意味で有名になってしまう。

俺は急いでスーパーの袋を開くと、アイスの袋を引っ張り出す。数十分前の俺、グツジョブだ……。

……帰りにコンビニで買い足して帰ろう。

「えっ? いいの! ほら45姉!」

9は某PAPIC●を受け取ると、45と半分に分ける。そして上の部分をちぎり、しばらく迷った様子を見せる。

「ど、どうした?」

「え、えっとね……これあげる! 少ないけど……お礼!」

そういつて9はPAPIC●の上の部分を差し出してくる。少しだけアイスが入っている。これが優しさというものだろうか……。

「わ、私も……」

45も同じように手渡してくる。両手にその小さいアイスを抱えたおれは、身動きができなくなってしまった。

「よし、それじゃあ元気に遊ぶんだぞ!」

外向きの笑顔を繕って幼女達を送り出そうとする。

しかし、子供だしすぐに去っていく……なんてことあるわけがなかった。

「うん、ありがとう!」

9は右手側に、45もスーパーの袋越しに左手側に座る。

「スマホで何見てたの?」

9が身を寄せてスマホの画面を覗き込んできた。9の腕が俺の腕にあたる。

暑い夏の幼女の身体は、どこかひんやりとした冷たさも持っていた。

第二話 もう逃げられないゾ♡

「これってどうするの?」

「ああ、これはね?」

9は俺の右側でスマホをいじっている。推しキャラを操作している推しとかいうよくわからない状況に、俺の頭は完全にオーバーフローをおこしている。

「あの、えつと……」

「ああお腹が空いたのか、これ食べるかい?」

「……!ありがとう」

左横には45がうさぎのぬいぐるみを抱きながらすわっている。お腹をおさえていたのでお菓子を与えてみれば、小さい口を一生懸命に動かしながら食べ続けている。

「さて、俺はそろそろ帰るけど……」

「うんわかった!」

そういつて9はスマホを返してくれる。45もベンチから立ち上がって、お尻に付いた土埃をはたいて落とす。

「そ、それじゃあ元気でな」

「うん、ばいばい」

9は元気に手を振って見送ってくれる。45も人形を持ってない方の手を小さく振ってくれていた。

まったく、推しのキャラのそっくりさんに会えるなんて、おれは随分と幸せな人間みたいだ。日頃の行いには今後も気をつけていこうなんて思っていた。

しばらく歩いたあとだった。なんだか周りの視線がむず痒い。俺自身を見られているわけではないが、少なくとも一度は注視されているみたいだった。ひどい人は俺の顔を二度見してくる。別に俺がイケメンであれば話は違うのだが、顔面偏差値は残念ながら平均以下だ。

しかし、確実にすれちがった人は俺の顔を一度か二度、驚いた様子

で見てる。

不思議に思いながらも歩いていると、ガラス張りの店の前で信号にひっかかる。適当にスマホでもいじって時間をつぶしていると、ふと突然視界に見覚えのあるお面が目に入った。

驚いてその方向……つまりは店のガラス窓を見る。そこには驚いた表情を浮かべる俺と、当たり前前のように後ろにいるUMP姉妹が映っていた。2人ともご機嫌な様子で、まるでイタズラが成功したかのような笑い方をしている。

「あれ？どうしてここに」

「だって私たちもこっちに帰るから」

「へえ、そうか」

まあ変な人についていくよりかは、自他共に認める絶食系男子の俺についてくる方がいいのかも知れない。

「そうか、それじゃあ途中まで一緒に行こうか」

「うん！」

9は元気よく声を出しながら返事をする。45もコクリと首を縦に振る。

「えへへ」

「随分と楽しそうだね」

「だってお兄さんと会えたんだもん」

エへへと9ははにかんだように笑う。かわいい、俺の推しがかわいい。たとえ子供になってようが本質は変わってなくてかわいい。

「うん……私もうれしいよ？」

推しの姉がかわいい。推しと似た容姿をしているくせに性格が全然違ってかわいい。全軍人が銃を投げ捨てるレベルでかわいい。

その2人が合わさることがかわいさの相乗効果をおこし、いずれ地球を2人のかわいさが満たすんだ。もう誰にも抗えない。世界はUMP姉妹のかわいさに包まれ……

「……さん？ちよつとお兄さん!？」

「つとごめんごめん、少し考えごとをしていたよ」

いかんいかん、あまりのかわいさに浄化されて昇天してしまうところだった。

「それで、君たちの家はまだ先なの？」

「うんーだからまだ一緒にいられるね！」

「うん、一緒……」

そうか……。まあ確かにここは住宅街だし、アパートもたくさんある。まったくあつたことが無くても、不思議じゃない。

……いや待ってくれ。推しがゲームの世界からこの世界に来た可能性？あるわけがないだろう。きつと暑さで頭をやられているんだよ。そう、幼女2人を推しの姉妹に幻視している俺と同じくらいにね。水分はしっかりとることをおすすめするよ。塩分もわすれずにね。

「君たちもこつちなのかい？」

「うん」

もうすぐ家に着くけれど、まだ姉妹は俺のあとに続いてテクテクとあるいている。歩調を2人に合わせているせいか、いつも以上に家が遠く感じていた。

「えっと……もしかしてこの建物かい？」

「えへへ、そうだよ」

結局2人は俺の住んでいアパートの目の前までついてきていた。

「へえ、奇遇だね」

「そうだね」

9はへらへらと、45もクスクスと笑う。

「何階かな？」

俺は二階に住んでいるから普段は階段を使っているが、2人は違うだろう。同じ階の住人くらいは把握しているし、そもそも子供2人が親と住めるのは各階に一部屋ずつしかない。

「二階だよ」

「へーそうかい、俺も二階でね……二階？」

「うん、二階」

そういえば二階の大きめの部屋には成人男性が住んでいたはずだ。

もしかしたら単身赴任している父親に会いに来ているのかも知れない。

「それじゃあ俺の部屋はここだから」

鍵を開けて部屋に飛び込むように入り込む。なぜだか、背中から冷や汗が溢れ出ている。

「はあ……なんだったんだあの2人は……」

荷物を置いて椅子に腰掛けると、インターホンの履歴ランプが光っているのが目に入る。

「……誰か来たのか？セールスかなにかだろうけど」

よいしょと立ち上がって履歴を表示する。

そこには、先程まで俺の後ろにいた2人が映りこんでいた。

思い………だした。おれは今朝、あの2人に起こされた。

そうか、やつぱり間違いだったんだな。部屋番号を間違えたとかそこらへんだろう。

あれ？まだ履歴が残ってるな………なんだろう……。ああ、またあの2人か。次は………次もか。あれ………あと数十件あるのももしかして………

なんとなく冷や汗の原因がわかった気がした。部屋番号を間違えたにしても、しつこすぎる。

まあ、問題はないだろう。目的であろう部屋の目の前まで送り届けたんだし、きつと今頃再会を祝っているだろう。

俺はベッドに寝転がるとスマホを開いた。9に貸したときのまま、通知を切っていたのを解除する。

すると、LINEというメッセージアプリで、母親からメッセージが届いていた。

『ごめん。最近私の姉が養子をとってあんたにも従姉妹ができたっ

て話したでしょ？あの子たち、今からあんたの家に数日泊めてあげてね〜』

は………？

いやいや母上？わが尊敬する母君さま？従姉妹って何ですか聞いてないですけど？それに何？『たち』ってことは複数人？を泊めてあげて？ムリムリムリムリ！俺んちにはベッド一つだけでソファも布団もないよ！

『いや、急に何？聞いてないんだけどその話』

とりあえずそう返信を返した。いや、落ち着け。まだあの2人と決まったわけではないだろう？でもなんだか……嫌な予感がする。

既読は案外早く付いた。それから間もなく、メッセージが届く。

『あれ？ごめんごめん。とりあえずあの子達にはあんたの部屋の合鍵を渡してるけど、多分インターホンを鳴らすと思うから入れてあげてね？』

『いやいや、無理だよ。どうやって泊めろと？』

『2人ともいい子だから大丈夫よ。ベッドに寝かせてあげなさい。あんたは床にでも寝てなさい』

『いや無理でしょ！』

とりあえず、見られたらヤバイものを子供では手の届かない高い場所へと隠す。ゴミだけは片付けて、物を端によせてスペースだけは作っておいた。

「いや、待て……2人？まさかね……？」

心臓がバクバクなっている。経験上、こういう嫌な予感っていうのはあたりやすい……。

勝手にガチャリと音になる。さつきかけた鍵が解錠される音だ。ゆっくりと扉開く音がする。

どうやら俺は、ここまでのようだ……。

第三話 夢が覚めるまで

俺は今、最高に足がしびれている。そりやそうだ。硬い床に正座なんて慣れないことをしているからだ。もう足の感覚がない。

普段は邪魔だからといってしまっているローテーブルを引っ張り出してきて、なけなしの二枚の座布団は向かいに座る2人に譲っている。2人は、笑顔だった。しかし、何も嬉しそうに笑っているとかそんな単純なものではない。人は怒りながらも、笑顔になれるのだ。

「その……ごめんね？」

「おにいさんはひどいです。私たちを締め出すなんて」

「いやだってまさか自分の家が君たちの目的地だとは思わないじゃない？」

「……やっちゃえ9」

45がそういうと、笑顔のまま9がスツと立ち上がる。そしてそのまま俺の背後に回って……いやまさかやめてくれええええ!!

「うぎやあああ！」

9は俺の足の裏を、つんつんと突いた。つつきやがった。感覚のなくなっていたと思っていた足は、触られたぜ！って自己主張を俺の我慢できない強さで示してきやがった。

「ふふふ……これで正直に話す気になったでしょう？」

45がドヤ顔をしている。こいつ……なんて目をしてやがる……。完全に場を支配したものの目だ……。だめだ、俺にはあ抵抗することができねえ……。

「……負けたよ。俺の負けだ。なんでも好きにするといえあつつつ！コラッ！降参したヤツに追撃は！やめっヤメロおおお！」

「あはは〜お面白い！」

9の容赦ない刺突が俺の足裏を襲う！すでに致命傷を食らっている俺に、逃れるすべはない！

「こらっ！覚えとけよお！」

「きやくタスケテ45姉〜！」

「ナ、9には手出しさせないわ！」

45は手を大きく開いて9を背中に庇う。9も笑いながら45の後ろへと身を隠す。

「45姉かつこいい〜」

「おらあー！いくぞおおおおあああ足痛いイイイ！」

サツと立ち上がった俺は足のしびれでバランスを崩し、45の目の前に倒れる。

「あはは！私たちの勝ち〜！」

「くつやられた……だが明日は俺が勝つからな……」

「私と9に勝とうなんて百年は早いわ！」

「見てろよ……ガクリ」

俺は白目を向いて気を失ったふりをする。ツンツンと9が生死確認をしてくるのがくすぐったい。

「……まあこれくらいでいいか」

「あっ起き上がった！」

「それで、どうして2人がここに？」

「あれ？おばさんから話は聞いてない？」

「……一応、君たちの口からききたいな」

下手すりや俺の人生が終わる。幼女を家に連れ込んだとして社会的に殺される。だから、慎重にだ。この子らの機嫌をとりつつ、そつと帰して、俺は平穏な夏休みを手に入れる！

ん？推しと過ごす夏休み？うらやましい？

待て待て。二次元のキャラである推しが三次元のこの世界にいるわけないだろう？だからこれは夢なんだよきつと。目が覚めるまで時間のかかる夢なんだ。

だから俺はこの世界を楽しむ！最大限に！警察のお世話にならないように！

「えっと私たちはようし？でおにいさんの従姉妹ってことになったんだけど」

「私たちの親、つまりはお兄ちゃんのおじさんとおばさんが旅行の予定をいれちゃっててね！私たちを世話してくれる人がいなくなっ

「ちゃったの」

「でも俺の母親とか選択肢はあっただろうに……なんでよりもよつて俺なんだ」

「あれ？お兄さんもしかして知らない？」

「え？なにを……？」

なんとなく嫌な予感がしていた。というのも俺の母親は、いつも突然何かをりはじめめる。専業主婦を辞め働き始めたときも、資格をとった時も、仕事を辞めたときも、俺がそのことを知ったのは当日だった。「お兄ちゃんのパパ、今は地球の裏側にいるよ？」

「なんで!?なんでなの!?どうしてよりもよつてこんなときに地球上で一番遠い場所にいるの!?!」

「ついでに私たちの親と一緒にだよ」

「ねえなんで!?どうしておじさんとおばさんまで地球の裏側なの!?どうして一緒になの!?仲良しってそぶりは見せなかったじゃん!?!」

「そしてさらに言っちゃうと、お兄ちゃんのお姉ちゃんはお出張で家にいないし、お兄ちゃんのお父さんは今頃空の旅だよ」

「そこまで把握済み!?……たしかにあつてるし」

俺はがつくりと膝をつく。

「なるほど……だから俺か」

まあ順当に親戚をあたっていったなら俺になる。祖父母はもう他界しているからな。おばさんとうちの母親は仲が良かったし、その点で信用できる親戚として残ったのが俺だったのかもしれない。

「それで……」

俺は2人の前にあぐらをかいて座る。

「2人はどこで9と45つて名前を？」

||*||*||*||*||

「……あれ？なんだっけ」

昨夜の記憶が曖昧だ……。頭がガンガンする。

身体を起こしてあたりを見回すと、酒を呑んだあとが残っている。

一昨日のままだ。昨日は……なんだか良い夢を見ていた気がする。
「さて……さすがに片付けようか」

ローテーブルの上にごみ袋を広げ、ポンポンとゴミを放り投げる。
酒や弁当、菓子やアイスなど、さまざまなゴミが散乱している。

ごみ袋を縛って外のゴミ置き場に捨ててくる。部屋に戻ると、少し違和感を覚えた。

なんて言っってはみたものの、やっぱりいつもの俺の部屋だ。きつと飲み過ぎで頭が殺られたんだろう。普段は飲まない缶チューハイもたくさんゴミで出したし。

俺は鍵をかけて靴を脱いだ。

ベッドにダイブして背中に何かがあたる。それは毛布だ。少し大きいから邪魔で、結局普段は隅においやっている毛布だ。

いや、おかしい。おかしいぞ。そもそも昨日は酒を買ってない。一昨日にすべて消費しきって家には1杯分すら残ってなかったはずだ。

それに部屋の違和感もある。頭がおかしくなったんじゃない。ローテーブルは一昨日出してない。基本、誰かが来た時にしか出さない。缶チューハイも自分では買わない。瓶で買って自分で割って楽しむのがいつもの俺だ。毛布だって、ベッドの真ん中に置かれているはずがない。いつもは隅だったり床に落ちていたりだ。

明らかに、いつもどおりの部屋ではない。確実に昨日、何かがあったに違いない……！

先程かけた玄関の鍵が、ガチャリと開く音がした。

第四話 誰だろう？・答えはわかっているけれど

「ねえ、どこいくの？」

出かけようとする俺に9がかけよってくる。さっきまではゲームをしていたのに、床にコントローラーを投げ出してこっちにきたみたいだ。

「ちよつとお買い物だよ。9ちゃんと45ちゃんがきたから食材がたりなくてね」

実際は食費もなかなかピンチである。単純計算すれば三倍、体格差を考えれば2倍から2.5倍くらいは使うことになる。仕送りとバイト代が溜まっていたからなんとかだったが、給料日まであと数十日を乗り切れる気はしない。

「わたしも行く〜！」

「えっ？」

「だから私も買い物に行く〜！」

9はいそいそと出かける準備をする。

「45姉はどうする？」

「わ、私は……で、でも」

「45ちゃんも来る？」

「い、いいの？」

「うん、もちろん」

むしろ1人で残すことの方が心配なもの……。だから俺を幼女を侍らせる不審者つて目で俺を見ないで！見るな！

「わかった、私も行く」

そういつて45はうさぎのポーチを握ってトコトコとかけよってくる。

「よし、それじゃあいこうか？」

「あつちよつとまって」

45はそういうと、ポーチから膨らんだ封筒を取り出す。

「これ、お義母さんから渡してって」

「え？うん、ありがとう」

受け取った封筒はなかなか厚さがある。そつと中身を見ると……論吉さんがぎっしりと詰まっていた。

「……これは？」

「私たちの生活費と、それからお兄さんへのお礼だつて」
明らかに多すぎる。

俺はそつとL—NEを起動させて母親に連絡をとる。

『おばさん宝くじでも当てた？』

『あれ？そうよ。よくわかったわね』

『なんかお礼つて言つていっばいお金もらった』

『そう、それは良かったわね、それじゃあ私はそろそろ寝るから』

そう返信したつきり、既読すらつかなくなつてしまった。

「まあどうやら本当みたいだし、いいか」

封筒から論吉を数枚抜いて、引き出しにしまう。まったく大金を小さい子に預けるなんておばさんは何を考えているんだか。しかし、こだけあればある程度自由にできそうだ。遊びにつれていくのもいいかもしれない。

「ほら、お金の問題も解決したし、早く行こう？」

9が扉を開けると、暗い玄関に外の光が漏れ出て、俺は目を細めた。
眩しい、ああ眩しっ！二日酔いの頭に効く……

「どうしたの？」

「具合が悪いの？」

9と45が顔を覗き込んでくる。

「いや、大丈夫だよ」

まったく、二日酔いつてやつはどうにかならんのか。初めてだぞ、二日酔いになったのは。

「じゃあいっ？」

そう言つて外にでる。すると、ちょうど同じフロアの人も外出するところだったようで、鉢合わせた。

「こんにちは〜」

「こ、こんにちは」

意気揚々と9が、それにつられ45も挨拶をする。さすがいい子

だ。挨拶するのは大事ってよくわかってる。

「ああ、こんにちは」

その男性は9と45に挨拶を返すと、視線を俺の方に向ける。

「あっどうも」

「どうも」

少し訝しむ目を見せるが、9と45が俺を引っ張っているのを見てその視線は和らいだ。まったく、不審者を見るような目を向けるなんて酷い人だ。

「ちよつと……相談事があるんですが少し時間いいですか？」

「えっ？俺ですか？」

「ええ」

悩むが……仕方がないか。俺は近所付き合いも大切にしているタイプの人間なんだ。

「9ちゃん45ちゃん、先に下に降りて待っていてくれる？」

「わかった！」

「……うん」

2人が階段を降りていく背中を見送り、それから男性の方へと向き直る。

「それで相談とは？」

「その前に君は学生だよな？」

「ええ、その大学の学生です」

「じゃあさっきの女の子は？」

「ああ、親戚の子ですよ。旅行に行ってる間、預かってるんです」

「そうか……」

そこまで聞いていったい何を言ってくるのだろうか。まさか昨日、俺が酔い過ぎて騒いでしまったとか？もしくは意外と女兒の声は響きやすいから気をつけてほしいとかか？

「じつは……お願いがあるんだ」

「お願い……ですか？」

「実は僕にもあの娘たちと同じくらいの娘が1人、いるんだ」

「ええ、それで？」

「実は今度、長期の出張に行かなくてはいけなくてね。でもあの娘は行きたくないっていうんだ」

「そ、そうなんですか」

「だから、君に娘の面倒を見てほしいんだ」

「え？でも俺は赤の他人ですよ？」

「……実は情けない話、実家から勘当されていてね。妻も死別していて頼れる人がいないんだ」

「そ、そうですか……」

やたら重いな。まさかの父子家庭だし。

「でも俺がその娘によからぬことをするかもしれないですよ？」

「するのかい？たとえばあの娘たちに、したのかい？」

「いや、まあしませんけど」

「それでこそだ。頼むよ。タダとは言わない。今度の仕事が成功すればいくらでもお礼ができる」

「そ、そうですか」

どうするか悩む。今更一人増えたくらいどうってことはない。けれど、だからといって安請け合いでするような話でもない。

「……ダメかい？」一応前金を支払うこともできるけれど」

そう言つて男性はカバンから何やら紙を取り出す。それは小切手だった。いや、初めて見た。映画とかでしか見たことないぞ……。

「ここに好きな額を書いてくれて構わない」

「好きな額？5千兆円って書いても？」

「ははは、そんな金を受け取る覚悟があるなら書いていいよ」

出せないとは言わないのか……。この男、何者だ？

「いえ、俺には決められません」

「そうかい。それじゃあ……これくらいかな」

そういつて考えられないような桁数を書き込んでいく。

「いや！そんなにいららないですって！じゃあわかりました！後で全部払ってくれればいいですからー！」

「本当かい!?それは助かるよ！」

「とりあえず急ぎではないんですよね？」

「ああ、出発は今週末だからね。それまでにまた伺うことにしよう」

「日程を空けときます」

「本当にありがとう。君がここに住んでいてくれて助かったよ」

「あはは……」

乾いた笑いをしていると、男性の出てきた扉がカチャリと音を立てて開く。

「お父さん、会社に行かなくていいの？」

「おっと、もうこんな時間か。それじゃあ失礼するよ」

そういつて男性は急いで行ってしまった。

「あなたが今度から私を世話するの？」

「あはは……嘘だろ？」

「なに？わたしの顔に何か付いてるの？」

ワンピースを着た少女は不思議そうに首をかしげた。さらさらの銀髪が光を反射した。

「い、いや。なんでもないよ」

「お兄さんも人を待たせてるんじゃないの？」

「あつそうだった。それじゃあまた今度ね！」

いけない……。9と45を待たせすぎてしまった。拗ねてないといいんだが……。

このあとめちやくちや拗ねてた9と45の機嫌をとるために、近場のコンビニでお菓子を買ってあげた。

なんとか機嫌をなおしてくれたことに安堵してしまって、さっきのこれまた見覚えのある少女のことはすっかり頭から抜けてしまっていた。

第五話 お買い物もの

「いらっつ……いらっつしやいませー」

いつものやる気のなさそうな店員が少しギョツとしたような表情をしている。いや、犯罪じゃない。これは犯罪じゃないからそんな目で見ないで。

食材はたくさん、2人の好みは知らん。そんなことを考える俺はまるでお父さん。

「ねえねえ、これ食べてもいい？」

そういつて9が指さしてきたのはサイコロステーキの試食だった。

「……アレルギーとかはない？」

「うん、大丈夫だよ！」

「ならよかった。45ちゃんもどう？」

「……い、いいの？」

そういつて45もトテトテと試食コーナーに駆け寄ってきた。

「やわらかうい！ねえ、これすごいよ！」

「うん、おいしい！」

2人は口をもぐもぐとさせながら、そわそわとこちらの様子を見てくる。

ちらりちらりと、こつちの様子を見て……くる……。

「わかったよ！今日はサイコロステーキだ！」

！
こちとら金なら余裕があるんじゃないや！この程度、なんぼのもんじゃない

それにこの娘らは女兒……食べる量も少ない！つまりは安上がり
！俺が食わなきゃいいだけの話！

「お兄ちゃんも食べなよ！美味しいよ？」

「はいっお兄さん」

9がそういつて、45がサイコロステーキを手渡してくる。

……美味しいな、もう一袋買っておこう。

「あら、良いお兄さんがいるのね」

試食コーナーから離れようとする、目の前に立ちふさがる人物が現れた。

俺がくる時間帯によくいる、パートのおばちゃんだ。フレンドリーなのはいいし、いろいろと知識もあるらしい……。のだが、あいにく話したことはない。

話したことはないけど……。だからって2人を足止めすることで強制的に俺の足を止めるとは……。なかなか策士である。

「今日の晩ごはんはお兄さんがステーキ焼いてくれるって」

「へえ、それは良かったわね」

一応顔ぐらいいは知っているし、2人も怖がってないからそのまま空気になるうとする。しかし、パートのおばちゃんアイが狙いを定めたのは俺だった。

「そのステーキね、このソースを掛けると美味しいのよ」

だ、大根おろしソース!?!いや、しかし……。ステーキにはオニオンソース派なんだが……。

「いえ、結構で……」

そう言い切ることは許されない。許されていなかった。やはりこのおばちゃん、策士だ。まさか視線は俺を向いているというのに、ターゲット自体は2人のままで!はかられた!

そう、さつきの様子をうかがうような目とはうって変わって、2人は好奇心と期待の目で俺を見てくる。

「わか……。りました。一つください」

この程度の出費……。痛くも痒くもないわ……。

「それとね!」

おばちゃんの攻撃フェイズは終了してないってのか!?

「今ならこっちのソースと一緒に買うとお得なのよ」

そういつておばちゃんが見せてきたのは、醤油ベースのステーキソースだ。

「くっ……。買います」

買い物かごにソースが入っていく。これはオニオンソースは断念するしか……

「お兄さん、あと十分したらタイムセールでね、オニオンソースも安くなるよ」

「買います」

もう良い。我慢などしてたまるか。俺はこの2人と幸せな食卓を囲むんだ。そのためならなんだってしてやる。販売商法に乗っかかる愚か者？なんとでも言え。

俺は自分と、それからあの2人のためならどんな汚名でも被ってみせよう！

「お兄ちゃん」

猫などで声が聞こえてはたと振り返ると、そこには両手にお菓子を抱えている9がいた。満面の笑みである。

「一応聞こうか。9ちゃん、それは何？」

「お菓子！」

系統が面白い。珍味からスナック、チョコ系まで揃えている。

「9ちゃんはお菓子が好きなの？」

「うん！でも45姉もお菓子が好きだよ」

「ちよつと、9」

「そうかい。それじゃあ2人の分のお菓子は入れていいよ」

「わくいありがとう！」

そういつて9は買い物かごにお菓子を入れてくる。

「45ちゃんはいいの？」

「……？あ、9が取ってきてくれたから」

「そ、そうなんだ」

どうやら45の好みは9が把握しているらしい。やっぱり仲が良い。姉妹間の仲が良いのは、微笑ましい。

「ねえ、他にはまだあるの？」

「……いや、コレくらいにしとこうか」

ステーキソースをかごに入れたあたりから諦めて、もうカートを使っている。買い物かごはもういっぱいだ。

よくよく考えたらこれを持って帰るの俺だ……。いや、俺ならできる。頑張れ俺、負けるな俺。

「いついच्छしやいませ〜」

レジはいつものやる気のない店員だが、今日はなんだか俺のことをじろじろ見てくる。

「……な、なにか？」

「い、いえ」

手際よく品物を通して、値段を表示する。いままでの俺だったら口からため息が出ていたただ、今の俺ならこの程度……！

「あ、ありがとうございます〜」

会計は普通に終わった。袋に詰めるのも問題はない。そこからが問題なのだ。俺に手がもう数本あればどれだけ良かったか……。

「お兄ちゃん、重いでしょ？ 私も持つー！」

「わ、私も」

やっぱりこの2人は天使かもしれない。お菓子などを詰めた軽めの袋を2人に託し、俺は両腕に力をいれる。

十中八九、明日は筋肉痛だ……。

||*||*||*||*||

おっと鍵がポケットに入ったままだ……。どうやってとりだそうかと両腕にある荷物を交互に見比べる。

「お兄ちゃん！ちよつとごめんね」

「9ちゃんいったいなにを……!?!」

9はあるうことか俺のズボンの右ポケットに手を突っ込んできた。小さい手が太ももに刺激を与えて、くすぐったくて笑いそうになる。

「あつた！」

そういつて9は鍵をとりだした。

「あつそういうことか」

よかった。突然9が身動き取れない男のポケットに手を突っ込む遊びを思いついたのかとヒヤヒヤした。

……ん？でもどうして右ポケットにあるってわかったんだ？

「ねえ9ちゃん、どうして右ポケットに鍵があるってわかったの？」

「お兄ちゃんいつも右ポケットに入れてるもん」

「ああ、そういうことか」

言われてみればこの部屋にすみ始めてからというもの、鍵を右ポケットにいれがちだ。

「……………あれ？」

「どうしたの9ちゃん」

9は手で止まっつとジエスチャーする。

「鍵が……………開いてる」

「締め忘れたんだなきつと」

「いいえ、お兄さんが鍵をかけるところ、私は見てたよ」

45も否定する。これは……………そういうごっこ遊びだろうか？なら付き合っつてあげるしかあるまい。

「9ちゃん、どうしようか？」

「私には荷が重いよ45姉、助けて」

「そうね、私と9で突入しましょ」

「うん、賛成！」

そういつて45と9は扉の前に集まる。

「よし、いくよ45姉」

「ええ、いくよ9」

2人が扉を開け部屋へと駆け込んで行く。まったく子供つてのは楽しそうで何よりだ。

あとを追っつて玄関に入ると、ありえない状況になっていた。

45と9は玄関に立ち尽くしている。部屋は違和感の塊で、きれいになつてる。まだそして、玄関の側のキッチンには、1人の少女が台の上に立っつていた。

「おかえりなさい。ずいぶん遅かつたわね」

舌足らずであるのに凜としているその声は、少し前に聞き覚えがあつた。

その少女は台から降りると、エプロンを外した。

その台には、416と数字が刻まれていた。もちろん、その数字が意味するところを察せないほど、俺はバカではなかつた。

第六話 どうしてこうなつたんだっけ!?

「えっと、君はおとなりさんの娘さんだよね」

コクリと少女は頷いた。

「もしかしくなくても、君は416って名前？」

再びコクリと少女は頷いた。

「えっと……ここは俺の部屋なんだけど、何をしてるのかな？」

「たまつた洗いの物を片付けてるの」

そう言う彼女の手を見てみれば、確かにスポンジとお皿を握っている。俺がためていた洗いの物の山は、今はその大半がきれいにラックに収納されている。

「ふーん。それで、どうやって入ったの？」

「えーっと」

俺から視線をそらす。

「開いてたのよ」

あからさまに嘘をついてますと顔に書いている。この少女、無表情なフリをしているが考えることが顔や行動に現れるタイプだ。なにこの子……まさにドルフロの416を外見も中身も幼くしてみたみたい。

「でもお兄さんはちゃんと鍵を閉めてたよ？私と9が見てたもん」

「ひ、開いてたんだってば！」

「お兄ちゃんはちゃんとしめてたよ！」

「う、うう……」

「こら、45ちゃんも9ちゃんもそれくらいにしとこうっ？」

「だっってお兄さん！」

「この子お兄さんが悪いって！」

「まあまあ、落ち着いて。それに俺のせいとは言っていないでしょ？」

「それは……」

「そうだけど……」

「416ちゃん、ごめんね？」

涙目になつてる416ちゃんの方を見る。

カシヤン

目を潤ませながら台を降りた416ちゃんの足元から、金属製の何かが落ちた音がした。

「……9ちゃん、45ちゃん。あれなんだかわかる？」

「わかんなくい」

「わ、私も知らない」

「だよね。俺も知らないや」

知らないなく。あんな感じの道具をどこかで見たとあるけど、知らないなく。こう細長いところとか、先っぽの方が折り曲がっているところとか、まるでピッキングツールみたいな形をしているけれど、いったい何なんだろうなく。

「いや！ピッキングツールだよねどう見ても！」

「ひっひい！」

「あつ待つて泣かないで！泣き出さないで！」

「ひっぐ……うっぐ……」

「ごめんね！急に大声出して驚かせちゃったね！ほら、お詫びにコレあげる！」

なんと期間限定！有名なチョコ菓子の期間限定味！数ヶ月くらい置いてある気もするけど！

「う、うん……」

良かった。受け取ってくれた。まじで、幼女を泣かせたとなっては紳士の方々からやられかねん。

「それで、何しにきたのかな？」

「えっと、今日は掃除」

「うん、見ればわかる」

だつて、明らかに掃除された跡があるんだもの……。床とか、張り替えたの？ってレベルでキレイだし。

「それじゃあ、どうして俺の部屋を掃除しにきたの？」

「だつて私も住むから。私、キレイなところ以外は住みたくないから」

「……へ、へえ」

随分としつかりとしてるみたいでなによりだ。

「ねえ416ちゃん！」

9がそう言つて416の方に駆け寄っていく。

「416ちゃんもここに住むの!?!」

9の背中しか見えないが、俺にはわかる。きっと9は今までにないくらいに、目をキラキラと光らせてる。絶対そうだ。

「う、うん……」

「わーい! やつたね45姉!」

9ははしやぎまわる。45も、どこか嬉しそうだ。

「でも416ちゃんのお部屋は隣だろう?」

「えっ……ダメ……なの……?」

「ああわかつたわかつた! いいから! 大丈夫だから!」

ベッドが広めで助かった……。あれならちびっこ3人くらい、受け止めてくれるだろ……。俺? 今日椅子か床だな。なに、若いからこれくらい大丈夫だ! 大丈夫なんだよ!

……こんど布団買ってくるか。

そんなこんなで、期間限定とは言え、同居人がさらに増えることになったのだった……。

||**||**||**||

「そういう訳で出張が早まってしまつてね。416には部屋の鍵を渡しているから、何か必要になったら入っても構わないよ」

「はあ、そうですか」

「安心してくれ。迷惑料として416にもたせているものがあるから」

「お金……ですか?」

「もちろん。なにかと入り用になるだろう? 気にせず使ってくれ」

「……もう何も言いません」

「そうかい。っと飛行機の時間だ。僕は行くよ」

「はい……お気をつけてー」

もう何も言うまい。お隣さんには警戒心というものは無いんだろうか……。まあ変な気は起こすつもりないけどさあ。

「416ちゃんよわ〜い！」

「また負けた！次は絶対負けない！」

「……猫のアプリケ、かわいい」

「当たり前でしょ！私のエプロンだもの！」

まあ、どうやら馴染めているようだし安心はしてる。けどさ、これはどうしろと……。？この札束をどうしろと？

416から渡された封筒には、案の定大金が入っていた。たしか100万円くらい。

あの子、どういう計算をしたら100万ってお金が出てくるの？わからない。俺にはわからねえよ……。

そろそろ盗難が怖くなってきた。いつか銀行に預けにいかなきやいけないかな……。

「お兄ちゃんもゲームしよー！」

「それじゃあ私はそろそろ……」

「ん？416ちゃんは帰るの？」

「いいや？」

416はエプロンと三角巾をして、どこからともなく台を取り出す。

「料理!?いいよ、俺がやるよー！」

「いいから私にまかせてー！」

自信たつぷりの表情をしている……。さすがの余裕、さすがは416 似の美少女だ……！

このあとむちやくちやムシヤムシヤした。
すつごく美味しかったです……。

||*||*||*||*||

「起きて！・ねえ起きて！」

ああ、ゲームの推しの声が聞こえる。推しの声に起こされるとか俺は幸せものだなあ。

「ねえー早く起きてー！」

ああ、推しの声とともに腹部にも衝撃が……。ん？・衝撃？

「うお!?」

「あっお兄ちゃん起きた〜！」

椅子で寝てた俺の膝の上には、9が乗っかっている。見回して見れば、45はベッドの上でうさぎのぬいぐるみを抱いてゴロゴロと転がっている。

台所の方には416がいる。件の台の上に乗って料理をしている。

「ん……んー？」

寝起きだからか、いまいち頭が働かないな……。どうしてこうなったんだっけ……。

第七話 まあ、そうだよね!

お、重い……。件のお金を銀行に預けて、その帰りにアイスを買って帰ろうとしたのが失敗だった。三人にプラス自分の分、喧嘩もしいような全種類複数個買うなんてバカだった。

ちようどお天道様は真上にあつて、容赦なく夏の日差しを俺に突き刺してきやがる。

まったく、こんなに暑いとアイスと一緒に溶けちまうよ……。俺の脳みそもさ……。それこそ今、目の前を歩いている人のようにフラフラしてさ、しまいには力が抜けていって倒れて……

……倒れて? 倒れて!?

「ちよつと! 大丈夫ですか!」

「えつあつうん……。いややつぱ無理……」

滑り込みセーフ! なんとか倒れる前に身体を支えることができた。つてよくよく見れば見たことのある顔だ。

「スーパールのバイトさん?」

「あつよく来る人お」

あのやる気のなさげなバイトの人に顔を覚えられていたらしいがそれはさておき。この女性をどうすればいいんだろう……。

「うへ、うへへ、人肌ひんやりしてる」

暑いっていうのに、その女性は俺に抱きついてくる。

いやさ、確かにさつきまで冷房ガンガンの室内にいたし、冷凍庫に手を突っ込んでアイスを取ってるから冷えてるかもしれない。

でもそれはよくない。良くないよ。俺だつて男だぞ? 女性に腕に頬ずりされるなんて、公表したくないぞ? 刺されかねん。

「えへ……。うへ……。あは……。うっ」

なんか嫌な予感がする。

こういうときは予感に限って良く当たるんだ。そう、例えば……

「お、オエー」

服に吐かれたりな……。

※※※※※※※※※※

『わかった。お兄さんは服が汚れただけなんだね?』

「うん。けどもう少し帰りは遅くなると思う」

『わかった。……9に変わるね』

『お兄ちゃん!運命の出会いをしたって本当?』

いや、服に吐かれるのを運命の出会いって言うのはいささか無理が
ありやせんか?

「いや、そんなわけないでしょ」

『ちえつ、せっかく新しいお嫁さん候補を連れてきてしゅらばつての
になると思っただのに』

うん、帰ってから9に問いただすことが増えたな。どこで修羅場な
んでワードを見つけたんだ、まったくもう。

「とりあえず、少し遅くなるから416ちゃんと仲良くしててね」

『うん、わかった!45姉もわかったってさ』

「よし、それじゃあ切るね」

『うん、ばいばい』

電話が切れたのを見て、はあとため息をはく。このまま沈んでいた
いが、そうは問屋が卸さない。看護師が近づいてくる。

「えっと……付き添いの方ですか?」

「はい。それで、彼女どうなんです?」

「大丈夫でしょう。ただの熱中症ですね、今は点滴をうけているとこ
ろです」

「それは良かった」

「もう少し待ってくださいね」

「え?」

「彼女の家のまでちゃんと送ってあげてくださいね」

「いや、あの人は彼女じゃ」

「今日は体力が下がっているわけですから、様子をみておいください」

い」

「この看護師、人の話を聞かないタイプだ……。」

「は、はあわかりました」

「ここは処世術、とりあえず言葉を濁すで対抗するんだ！これもバイトで培った力！ありがとう店長！」

「それじゃあごゆっくり〜」

看護師さんはにんまりとしながらさっさといった。まったく、若い子はお盛んね〜っていう目でこっちを見ないでくれ。

まあ、仕方ないか。腕組んでるような体勢で入ってきたからね。誤解されるのも無理はない。

ガタガタと扉をスライドさせて、部屋に入ってみる。音に気がついてはいるものの、寝転がったままだ。

「あつその……この度はご迷惑をおかけしました？」

なぜ疑問系なんだ。それに寝転がりながらそんなに丁寧な言葉をつかわれると複雑な気持ちになる……。

「いいですよ。でもどうしてそんなに厚着を？」

俺なんか半袖に七分丈のズボンでも汗だくだった。というのに、目の前のこの子は真つ黒なズボンに黒いパーカーまで羽織っていた。

「それは……バイトにいく前で……」

「へえ、バイト前……。バイトは大丈夫だったの？」

「はい、社員さんにいったら今日は暇だしゆっくりしていいって」

なんだよ……いいバイト先じゃねえか……。ますますあのスパーが気になり始めたぜ。

「は〜い、失礼しますね〜」

そう言っただけの看護師が入ってくる。まったくこの病院にはもつとまともなのはいないのか！

「点滴は終わりですね〜。受付の前でお待ちください」

この看護師……手際はめっちゃいいだど!?!熟練の看護師だったか……。

「はい、どうぞも」

そういつて身支度をする。といつても、また黒いパーカーを着よう

としてるだけだけでも。いやいや、それで倒れたばかりだろ。

「パーカーは着ない方がいいんじゃない?」

「でもこれ着ないといけないから……」

そういつて指差すのはポロシャツについたワンポイントのマークだ。もちろんあのスーパールのマークである。

「それなら……仕方がないのか」

「うん、暑いけどね……」

「あら、彼氏さんのソレを着ていけば?」

あの看護師……そつと後ろ手に隠した俺の上着を指さしていきやがった。

いやね!彼氏シャツとかね!良いと思うよ!でもね!この子彼女じゃないんだわ!ただの顔見知りつて程度なんだわ!

「ははは、着るかい?なんてね……」

ほら、笑い飛ばせ!拒絶はしてほしくないけど遠慮しますアハハつて!

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて……」

「……えっ?」

ちようどその子の目の前に差し出してたもんだから、スツと取られてしまった。

「白いから透けるけど、黒いパーカーよりはマシ」

黒いポロシャツは確かに透けている……。本当に抵抗感なく着ちゃったよこの子。もしかして俺のこと好きなの?なんてね。

受付にいくと、まあなんとというか少子高齢化つて本当だったんやなって実感する。若いのなつて俺たちしかない。

だからつて!こう生暖かい目で見えるな!若いもんはいいよなつて目を向けるな!

「あつ私みたい。いつてくる」

そういつて受付の方へと行つてしまった。

受付のお姉さんが口を開いて、名前を呼ぶ。

「G11様」

「は〜い」

……。まあそうだよねえ。だって『見たことのある顔だ』つたんだもの。そりゃね、普段は似てるなくとかで済んでたかもしれないよ？でもさ、ウチで待ってくれてるチビたちをみるとさ、こう、変わって見えるんだよね。

「おまたせく。今日はありがとう」

「どういたしまして」

そういつて笑った表情は、俺の知ってるゲーム内のG11より少し大人びて見えた。

第八話 残念だが、俺にも無理だ

「あつ買い物して帰らなきや」

「ん？それじゃあそのコンビニでいいかな？」

「うん……」

コンビニに入ると、涼しい冷房の風が俺たちを迎え入れてくれる。そうか、ここがエデンか……

「今日の晩ごはんを……」

目の前をあるく彼女の足が、弁当コーナーの前で曲がりかけたのを見逃す俺ではない。知っているぞ。そのさき先に何があるのかも分かるぞ。

「えつと……どれにしようかなー」

少し背伸びをしながらサラダのコーナーを見てるG11は、いまだチラチラとそのコーナー……カップ麺のコーナーに目が移っている。

「そうだ。俺、カップ麺買っていきたいからあつち行ってもいい？」

「……わ、私もついてくよ」

わかりやすく目を光らせながら、ついてくる。なんだか身長も低めで良かったわ。

「これこれ、これがいいんだよ」

「わかってるくでも私はこつち」

「おつ通だねえ」

「でしよー？」

ニコニコしながらカップ麺を手にとっている。

「……あついや違うんだよ？いつもは食べてないんだよ？」

「いや、気にしないけど……」

「食べてないよお」

「いや、気にしないから」

「そう？じゃあ遠慮なく」

ポンポンとかぐにいくつもいれられていく。随分と買い込むな……。

「満足？」

「まんぞくう」

満ち足りた顔をしながらレジへと歩いていく。まったく……サラダを買うつて姿勢はどこにいったんだか……。

「ありがとうございます！」

元気の良い店員の挨拶を背に、コンビニを出ていく。

「さて、帰ろうか」

「うん……」

俺たちは歩きはじめる。そう、俺の家の方向に……。

「家、こつち方面なんだ」

「うん、そうだよ」

交差点にさしかかり、同じ信号で立ち止まる。

「同じ方面だね」

「うん、そうだね」

なんとなく嫌な予感がしてる。なんたって俺の隣に立っているのは、ゲーム内で45、9そして416と同じ小隊にいるメンバーだ。そして、45、9、416は俺の家にいる。俺の家にいるのだ！

「あ……？」

「ん？何……？」

今、俺はすんでるアパートの玄関にいる。もちろん隣にG11もいる。もしかして、ここに住んでる……？」

「うん」

普通に頷く。玄関の扉をくぐって、オートロックの扉を開く。

「あつエレベーターは使う？」

「いや、2階だから使わない」

「……ふーん」

いや、二階？いや、まさかね？

「それじゃあ私はここだから」

「あつうん」

ですよー。うん、察してた。

ガチャンと音をたてて、隣の部屋の扉が閉まる。

「だよなあ。そりゃこんだけ揃ってたらそうだよなあ」

「なにが？」

扉が開いて、お玉を持った416が首をかしげてくる。

「いや、なんでもないよ。ただいま」

「おかえりなさい。ご飯できてるわよ」

「今日は何だい？」

「当てて見て？」

「といっても玄関から見えてるけどね」

鍋の中にはカレーがあり、野菜を切った跡もある。

「カレーとサラダってところかな」

「正解。ほら、早く手を洗ってきて？」

「はいはい」

洗面所で手を洗う。

「ちゃんと石鹸で洗いなさいよ」

「わかってるよ」

416はまるでお母さんだな。家事はするし、衛生面も気にするし、少し口うるさいところなんてまさにそれだ。

「ほら9ちゃん、ゲーム片付けて。45ちゃん、手伝ってくれる？」

「はいーい！」

「うん、わかった」

9と45はさつと片付けて、416のいる台所に手伝いにいく。まったくいい子たちだ。手がかからなくてお兄さんもおもわずにっこりだ。

「よし、それじゃあいただきます」

「いただきますーす」

3人の声が揃った時だった。

ピンポン

インターホンがなった。こんな時間に。しかも、オートロックのところではなく、部屋の扉挟んだ向こう側だ。

「私がでしょうか？」

「いいよ。9ちゃんは食べてて」

不審者つてこともあり得るから、細心の注意をはらわなきゃならん。なんとつてこっちは子供が3人と非力な一般大学生が1人だ。のぞき穴から、そつと外を見る。

そこに立っていたのは、さつき別れたばかりのお隣さんだった。ど、どうしたんですか?」

扉を開けると、腕にすがりつかられる。

「お湯……お湯貸して……ポット壊れた……」

「まさか家にカップ麺しかないんですか?」

「ぐっそれは……そうだけど」

「……416ちゃん、カレーまだ残ってる?」

「うん、残ってるけど……」

よかった。二日目のカレーつてのも乙なもんだけど、やっぱり皆で食べないとね。

「というわけなんでカレー食べて行かない?」

「えっ!?!いいの!」

グツと距離を詰めてくる。近いよ近い。ほら、チビたちも見てるからさ、もつと節度をもつた距離というものをね?

「ねえ、お姉ちゃんつてスーパールの店員だよね」

「どうしてここにいろの?」

ああ、UMP姉妹。そう初対面の人に詰め寄らないで。相手がこの人だからいいけど、不審者だったらどうするの。

「えっあっあれ?た、たすけて?」

ふふふ、UMPサンドには勝てないだろう?でもな……俺も止める手はないんだ。

「諦めて?」

「そんなあ〜」

情けない声が、部屋に響いた。

第九話 目標目前！突撃い！

「起きて！ねえ起きて！」

ああ、ゲームの推しの声が聞こえる。推しの声に起こされるとか俺は幸せものだなあ。

「ねえ！早く起きて！」

ああ、推しの声とともに腹部にも衝撃が……うっ、うおっこ、腰に響く……。

「9ちゃん……もうちよつと優しく起こして……」

「ん？お兄ちゃんどうしたの？元気ないよ？」

「いや、大丈夫だよ」

俺だつてまだ若いんだから、そんな数日椅子で寝たからって身体壊すわけではないよ。

「お兄さん、ご飯できてるよ」

??45が駆け寄ってきて、足にコツンとぶつかる。

!!!

??どうしたの、変な顔して？」

い、いや……なんでもない」

な、なんでもない。なんでもないんだ。まさか利き足に当たられて、それが身体の節々に響いたとかそんなわけじゃないんだ。だからそんな顔を向けないでくれよG11。

G11の目線は俺を見たあと、そつと目を俺の後ろの方に向けた。つてどうしたの？急に顔が青ざめて……？

「……お兄さん」

ん、何かな……つて包丁じゃない？こ、こっち向けてこないで！

「よ、416ちゃんどうしたの」

「そ、その……壊れてしまつて」

「ん？ああ、刃の部分が欠けてるのね」

「手が滑つて、刃の方から落ちて……」

「いいよいいよ。それより416ちゃんは怪我はない？」

「もちろん」

「なら良かった。けど危ないし……そうだな」

これはもう、あそこに行くしかなない。幸い人手はいるし、保護者……になるかはわからないがG11もいる。

「よし、デイスカウントストアに行こうか」

そう、これは416の安全のためだ。ついでにお布団も買うだけだ。だから、これは決して俺の安眠のためという訳ではない！断じて安眠のためではない！

※※※※※※※※※※

「わー！すごい！ひろーい！」

「9、待って……！」

「9ちゃん！45ちゃん！ちよつと待って！」

急いで2人を捕まえる。店内で走り回ると危ないじゃあないか。

「こらっ。危ないだろう？」

「う、うん。ごめんなさい」

「ご……ごめんなさい……」

「わかってくれたなら何よりだよ」

「じゃあお兄ちゃん、手繋いで〜」

んん？9は何を言ってるのかな？お兄さんにはわからないな？

「わ、わたしも……」

45も？ああ、ダメだよ……完全に幼女2人を拉致してきた不審者だよ……

「G11……タスケテ……」

11！
逆捕まえられた宇宙人状態で助けを求める。君だけが頼りだぜG

「んー、無理い」

ああ、もう片手は埋まってるのね。416……G11になついちちゃったのね。いつの間に……

「ねえねえ、お菓子見てもいい?」

「あ、ぬいぐるみ。……なんでもない」

「よ、よし! 買い物の最後にお菓子コーナーとぬいぐるみのコーナーに寄ろうか!」

「ほんと! やったー!」

9は手をブンブンと振り、45は少し手をにぎる力が強くなる。喜んで……るのかな……?」

「私は……?」

「よし、まずは包丁見ようか!」

「ほんと……? じゃあお皿も見ていい?」

「いいよいいよ!」

「じゃ、じゃあ……グラスとお箸も?」

「ああ、いいぞ!」

表情こそは変わってないけれど、その右手はブンブンと振られている。G11がだるそーな表情をしてるけれど、それがまたなんだか凸凹姉妹って感じで似合っている。

「お似合いだね」

「それ、お兄さんが言う……?」

「やめろ……不審者を見るような目で俺をみるな……」

「そうじゃないけど……まあ、いいや。416のことも頼んだよ」

そういつてG11は背中を見せて、手を振りながら店内へと消えていった。……消えていった!? ちくしょう逃げられたか!

「お、お兄さん……」

だー! 困ります! 服の裾を掴まれたら困ります!

「わ、わかった。じゃあまず45ちゃん! カート持ってきて!」

「は、はい」

「416ちゃん! まずは台所用品から見ようか」

「う、うん!」

「ねえねえお兄ちゃん! 私は?」

「9ちゃんは! 9ちゃんは……」

やばいな……どうしようか。

「そ、そうだな……それじゃあ9ちゃんは45ちゃんのサポートだ！」
「了解！」

ビシツと敬礼して、45と一緒にカートを押しはじめる。仲の良い姉妹でなによりだ……。

※※※※※

「この包丁も……いや、こっちの方が良い……でも値段が……」

この子食い入るように包丁を選んでもよ。

「416ちゃん？値段は気にしなくていいよ？」

なんとたつて、君のお父さんからもらった多額のお金が有り余っているからね。

「コスパが最高のモノを選ぶまで帰れないわ」

「そ、そうかい」

何度もコーナーを往復して、ようやく一本の包丁を持ってきた。

「これでいいの？他の包丁は？」

「これ一本あればたいいなんでも切れるから」

「ふーん」

受け取った包丁を見る。ああ、有名なメーカーだから……ここらへんかな。おつあつた。

「じゃあこれを買おっか」

「そ、それは……」

俺が手に持つてるのは、包丁数本が入ったセットだ。416の持ってきた包丁もセットの中に含まれている。

俺の家には一本しか包丁が無かったからな。こういう発想も与えてやれなかったかもしれない。

「でも無駄遣いはダメよ」

「じゃあ416ちゃんが存分に使って、無駄じゃなくしてくれるかい？」

「っ！……わ、わかったわ」

顔を真っ赤にしながら、少しうつむいてしまった。

「わ、私が全部、しつかり使うまで料理する」

「そうかいそうかい」

やる気が出たようで何よりだ。お兄さんも思わずニツコリしてしまったよ。

「ねえ！お菓子コーナー見てきていい？」

「まあ待ちなつて9ちゃん。皆で行こう？」

「うん！ほら、早く行こうよ45姉！」

「あつ待って……」

9が45の手を引いて菓子のコーナーへと歩いていく。

「416ちゃん、ゴメンね？」

「別に気にしないわ。それにいい食器もなさそうだし……」

そういいながらも手を握ってくる。ほんと君たち手をつなぐのが好きだねえ。

「……もうちよつと力を緩めてくれない？少し痛いな」

「今度は……逃さないように……」

ははは、確かにさつきはG11に逃げられてたもんね。

「もう、お兄ちゃん遅いよ？」

つと待たせすぎたか……。9が戻ってきちやつたみたいだ。両手にはすでに菓子が抱えられている。

「ちよつと多くない？」

「でもね！ここが私の分で、これが45姉の分。それからこっちは416ちゃんの分！それからそれから……。これがG11お姉ちゃんの分！」

「そうかそうか。いいよ、かごに入れて」

いい子かよ……。というかすでに416とG11の好みも把握してるのね。いったいいつの間？

「ねえねえ、あとはー？」

「うーん、そうだな」

布団……は重いから最後でいいな。食材も今日はいいだろう。あとは……

「ぬいぐるみ、だったね」

「え？いや、私のは……」

「……9ちゃん、連れてってあげて」

「りよーかいだよ！」

また9が45の手を引っ張っていく。つと曲がり角から人が……！

「9ちゃん！危ない！」

クソツ遅かった！9が人にぶつかって後ろに倒れていくのが見える。その小さな頭は、衝撃に強くできているようには到底見えなかった。

「つとセーフ！」

ま、間に合った……。ほぼ滑り込みでキャッチすることができた。

「ごめんなさい！怪我はないかしら!？」

「ええ、まあなんとか」

「本当にごめんなさいね」

外人さんだろうか……。随分と長身で、それにしてもグラマラスなものをお持ちであった。髪を結んでいた大きな青いリボンはいくつばかり頭に残りそうだな……。

「9ちゃん、周りは良く見ようね」

「うん。お姉さんもごめんなさい」

「あら、いいのよ。子供は少し元気すぎるくらいがちょうど良いって言うもの」

そういいながら、スマートフォンを赤いポーチから取り出した。

「いつけない。私もういかないと。それじゃあ」

そう言っでどこか行ってしまった。

「あっ……」

「416ちゃんどうした?」

「G11さん、発見」

そういつて指差す方向には、ソファコーナーでだらしなく寝息をたてているG11がいた。見つけたぞ。見つけたぞー！

「全員でおこしておいで。騒がしくしないようにね？」

「うん、わかった！」

「……うん」

「お兄さんがそういうなら……」

「よし、それじゃあG11ちゃんに向けて、突撃い」

もちろん小声だ。相手は抵抗する間もなくチビ達に起こされる。

まさに最強の布陣。

そのあと、フロアに消え入るような悲鳴が響いたけれど、だれも見えていなくて助かった。

第十話 特別編 本当に……？

「はく疲れた」

「渚ちゃん、お疲れさま。まかないだよ」

「ありがとうございます、店長」

私の目の前に、親子丼が出てくる。ついでにアルコール臭の漂う琥珀色の液体まで置かれる。これがもうたまらないんだよね。

「今日は特別いそがしかったからね、サービスだよ」

「いいんですか!?!ありがとうございます!」

グラスに少し口をつければ、独特の風味と自己主張の激しいジンジャーの匂いが鼻から突き抜けていく。

この目の前の親子丼も絶品。とろつとろの卵が鶏肉に絡みつき、未だ私にすら教えてくれない味付けによって、クドくなく舌に残る。この絶妙な味加減は店長しかできない。

一介のバイトである私にここまで美味しいまかないを出してくれるのも、この店長の人の良さがあってこそだ。ありがたい。

「帰り道は大丈夫かい?」

「はい、慣れてますから」

こう見えて逃げ足には自信がある。やばい人にあつたら速攻で逃げる、を徹底してるから大丈夫だ。抵抗はしちやいけない。

「ごちそうさまでした」

手をあわせてふうと一息をつく。アルコールも入ってで少し気分もいい。

「お粗末様でした。それじゃあ気をつけて帰るんだよ?」

「はい、店長。お疲れさまでした!」

トートバッグを持って店を出る。もう日付は変わっている。道を照らすのは街灯と、それから時折家庭から漏れ出ている光くらいだ。

スマホを確認すると、いくつかの通知とともに、あるゲームの通知が入ってる。

ドールズフロントライン

何かの広告で見て、可愛い女の子につられてホイホイインストール

してしまったゲームだ。内容を見てその世界観とのギャップ差で完全にドハマリしてしまつて、いまや唯一しているソシヤゲになつていたりする。

特にこれといって推しているキャラがいるわけでもない。でもそれは好きなキャラがないわけじゃなく、みんなを平等に愛してるつてスタンスをとっているだけなんだよね。

さつと後方支援だけ出して、スマホをしまふ。夜道の歩きスマホは危ないからね。さて、今日はもう家に帰ろう。

淡く照らされた道を、私は歩き始めた。

※※※※※※※※

家の近くに来た時だった。珍しくこの時間だと言うのに話し声が聞こえる。声は二人分、女性みたいだ。

「ちよつと、こんなところでつぶれないでよ〜」

「あなただつて酔つ払つてるでしよ〜?」

その2人はどうやらお酒を飲んでるようだった。なんだか面白そうだな。

そつと近づいて、曲がり角に体を隠して聞き耳をたてる。

「…………ふわあ、ねむい〜」

銀髪の子がそういつて地べたに座り込んでしまった。

「ちよつと…………、立ちなさいよう〜」

茶髪の子が手を引つ張るが、その力は弱々しい。

「うっ…………」

あつ銀髪の子がうずくまつて…………?

「吐きそう」

「バカー!こんなところでやめてよね!」

「うっ…………うっ…………」

どうやら飲みすぎて吐きそうらしい。急性アルコール中毒?だとまずいかもしれない。

「だ、大丈夫ですか?」

幸いスポドリなら持つてる。もうぬるくなってるけれど、酔っぱらいにはちようどいいでしょ。

「これ、飲めますか……?」

「口移しして〜ん〜」

そういつて銀髪の子は口を尖らせる。

「大丈夫みたいですな」

すつと離れようとするけど、銀髪の子が腰に抱きついてくる。に、逃げられない……?

「だいじょう……b……うっ」

アニメだったらキラキラのエフェクトがでるんだろなーと思いなから真つ黒な空を見上げる。

ああ、これバイトの服装なんだけどなあ。明日の夜もバイトなんだけどなあ。

「その……相方がごめんなさいね?」

茶髪の子が心配そうに、そして申し訳なさそうに近づいてくる。

「気にしないで、家近いんで。それよりそっちは大丈夫ですか?」

「ん?」

見たところ……ここらへんの人でも無さそうだ。茶髪の子のスマホには、ここら一体の地図が表示されている。こんな何もない住宅街で地図をみるなんてよそ者ですつていつてるのと同じだから気をつけたほうがいいと思うなあ。

「私の家近いので、シャワーだけでも浴びていきますか?」

「いいの?それじゃあお言葉に甘えさせてもらうわ。ほら、行くわよ」

「んー?うっ」

「ああこらー吐かないでー!」

再びキラキラのエフェクトが流れたのは言うまでもないかな。無事?に茶髪の子の服も汚れて、全員で私の家に向かうことになった。片付けておいてよかった……。

しかし……ずいぶんとクオリティの高いコスプレだなあ。なんもない街中でやってるのはすこし複雑な気分だけど。

チュンチュン

こういう朝に限って、すずめの鳴く声がしっかりと耳に入る。

「あら？起きたの？」

「おはよう？」

2人が両側から耳元で囁いてくる。

「昨夜は……、楽しかったわ」

「まさかあんなことをする人だなんてね。私もつい熱くなっちゃった」

つつい虚無顔を浮かべる。

2人がグイグイと身体を押し付けてくる。私の腕に、その豊満で柔らかいものが直接押し付けられる。そう、直接だ。

今、私は、狭いベッドで2人の美女に挟まれてる。その2人の美女は裸だし、私も裸だ。

「何が……あつたんだっけ……？」

「あら？わすれちゃったの？」

「ふふふっ、あんなに可愛かったのに」

本当に昨夜の記憶がない。本当に覚えてない。だからFALL似の茶髪の子と、57似の銀髪の子に挟まれて裸で寝ている理由がわからない。

「……あの、そもそもお二方はどなたですか？」

「あら？」

「わすれちゃったの？」

クスクスという笑い声が、両側から聞こえる。少し背筋がゾクリとした……。

「私はFALLよ」

「私はFive—seven。仲良くしましょう、渚ちゃん？」

随分とロールプレイにも気合が入った人たちだなあ……なんて思
いながら、私は起き上がる。

部屋の中は、まるで酔っ払いの酒盛りが行われたかのように、酒瓶
とおつまみのゴミが散乱していた……。

せつかくの日曜日だというのに、まずは部屋の掃除からしなきゃい
けないみたい。

「もう少しゆっくりしましょうよ」

「ヒヤン！」

57が腰に抱きついてきて、なにかが背筋に流れた気がする。驚い
てつい甲高い声が漏れてしまった。

本当に……酔いつぶれて寝ただけだよね……？

第十一話　これが布団の力

G11を起こした俺たちは、あるコーナーで立ち止まる。
もちろん布団のコーナーだ。

「お兄ちゃん、お布団買うの？」

「うん、最近手狭になってきたからね」

416やG11の家から持ってこれないかとも思ったが、2人ともベッドだとか。これは新しく買うしかない。ふかふかでいい感じのをな。

「それじゃあさ、これにしようよ」

そういつてG11が指さしたのは、この店で一番大きい布団だった。ファミリーサイズってなんだ？キングサイズまでしか知らないぞ？

「さすがにこの大きさはいらないでしょ」

「そう？でもベッドをどかしてこれ一枚の方がいいと思うけどなあ」

「いやいや、それだと俺が寝る場所が」

「え？一緒に寝ればいいじゃん」

「……………は？」

「お兄ちゃんと一緒？」

「お兄さんとなら……………一緒に…………？」

どうしてまんざらでもない顔をするの君たち？いや、犯罪だよ？

「よし、じゃあきまりだねー」

そういつてスツと注文カードをカートに忍ばせる。

「いや、さすがにまずいでしょ？だって俺男だよ？」

「んー」

「……………でも」

「お兄さんならねー」

ねーつと3人で顔を見合わせてるけど、何？俺なら無害って？これでも健全な1男子なんだけど？

いや、まあ危害加えるつもりもないけどさ。

「もう少し危機感をだね」

「だつてお兄さんにかぎってそれはないでしょ」

再びねーつと3人で顔を見合わせる。いや、わかってくれてるのはありがたい気もするけど、なんか違う。さすがに9や45や416には保護欲が湧くけれど……G11はギリギリいけそうな気が……いや！いかないけどね

「それよりほら、早く帰ろうよお。私つかれた」

「はいはい。っとその前に」

確かこつちのコーナーだったよな。そうそう、ここを右に行けば……

「……っ！お兄さん？」

「45ちゃん、好きなもの持っただい」

二度三度確認するかのようにつつちを見た後、45は向こう——ぬいぐるみのおかれたコーナーへと歩いていく。

うしろを見れば、羨ましそうに9と416がその後ろ姿を眺めている。ふたりとも既に自分の物を買ったから遠慮してるのかな……なんていい子たちなんだ。こうなつたらかける言葉は決まっているよな？

「2人とも、行ってきていいよ。選んでおいで」

「えっ？」

「いいの!?!」

さあ行っただい……金ならある。君たちの笑顔を見るのがおじさんの使命なんだ……。

「笑顔を見るのがおじさんの使命だーなんて思っただいそんな顔してるね」

「G11ちゃん、その的確な指摘はやめようか？」

「あはは、お兄さんはほんと面白いなあ」

「……あのさ、俺っただいそんなに無害に見える？」

「見える見える。だつて私にそういう目線向けないもん。もちろんあの子たちにもね」

「……それは褒めてる？」

「半分ね」

残り半分は何なんだ……。っと戻ってきたか

「えつと416ちゃんのは黒猫で、9ちゃんのは犬で……。45ちゃんのはうさぎか」

順当なチョイスで少し安心した。これで変な動物とかがきたら反応に困るからね。

「よし、それじゃあレジに行こうか」

はいという返事とともに、レジへと並び始めた。

そのあと、レジで見たこともない金額を見て卒倒しそうになったのは言うまでもないだろう。まあもちろん財布に補充してきたから大丈夫だったけどね。

※※※※※※※※

さて、帰ってきたわけだが……。

「ベッドを片付けようか！」

「おー！」

となりには9だけがいる。他の三人？食材の買い出しにいったよ。半分追い出した形だけどね。

「さて、9ちゃん」

「どうしたのお兄ちゃん」

「いや、怪我はしないようにね」

「うん！」

よーしと気合を入れながら軍手をつける。推しが気合をいれて頑張ろうとしている。

それだけで俺だってやる気が出てくるってもんよ。

「そこ、支えてて」

「うん！」

「このネジを箱に入れてくれる？」

「わかった！」

「よしっ、危ないからちよつとどいててね」

よいしょつと解体したベッドの骨組みを部屋の隅にまとめる。ビ

ニール紐をとりだして巻きつけて……

「9ちゃん、ここ切って」

「はい」

結んだ紐の端を切ってもらおう。あまりにいい笑顔でハサミを向けるから、なんだか背筋に冷たいものが走っちゃったよ。

「よし、終わりだ！」

「終わり！」

「というわけで次は新しい布団だ！」

「布団だ！」

圧縮された布団を開けば、部屋の半分を占拠する。

「これなら十分寝られそうだな……」

「わーい一番のり！」

広がりがきつた布団に9が飛び込んでいく。その小さい身体を優しく受け止める。

「お兄ちゃんもおいでよ」

足をパタパタさせながら9が布団の上から呼んでくる。まあままで、ゴミを片付けたり敷きパッド敷いたりまだいろいろとすることが……

「でもまあ感触を確かめるくらいはいいよね」

ふかふかの布団が身体を沈ませる。ああ、これが布団か……布団の
ちかちか……

3人が帰ってくるまでのあいだ、俺は久しぶりに熟睡できたのだ。た。

第十二話 俺の勝ち（プルプル）

突然、本当に突然だった。

意図せずして、早朝に、スマホから大音量で流れ始めた。

「ん〜どうしたの兄ちゃん……」

「9ちゃん起きちゃったか。まだ朝早いし寝てていいよ」

「う……ん。そうする」

9が再び寝付いたのを見て、俺はスマホの画面を見る。

そこには、大雨の緊急速報を伝える通知が届いていた。

幸い、近くに大きな川はない。よほどでない限り、被害がこっちに及ぶことはないはずだ。

「……災害用の持ち出しバッグ、どこにしまったかな」

誰も起こさないようそつと起き上がって、玄関先までいく。

たしか靴箱の中に……

「あつたあつた」

リュックを取り出して中身を見る。非常食と固形燃料や断熱シート、それから携帯トイレがそれぞれ一人分しか入っていない。

まだ布団で眠る4人の方を見る。

今度買い足しておくか……

寝直そうかと戻ると、ギョツとシャツの端を掴まれる。

どうやら416が無意識に掴んだみたいだ。父親がいなくて寂しかったりするのかな？

無理に引き剥がすこともないだろう。そのまま再び眠りについた。

||*||*||*||*||

トントントン

規則的な音で目が覚める。416が料理をする音だ。毎朝聞くお陰でこのリズムが心地よくなってしまった。

「おはよう、416ちゃん」

「おはよう、お兄さん。もうすぐでござるわ」

「わかった。手伝おう」

よっこいせと起き上がるが、まだ45と9とG11は寝息をたてている。G11はともかく、45と9が俺よりも長く寝ているのは珍しいかもしれない。

「手伝ってくれるんじゃないの?」

「ああ、すぐいくよ」

と思つたが……45と9が俺の足を掴んでいる。

「……どうしたの?」

「いや、それが……動けないんだ」

「それ、起きてるわ」

いや、まさか……

と思つて少し足を動かす。すると、足を掴む力が強まった。これは確実に起きてるな……?

「45ちゃんに9ちゃん、離してくれないかい?」

2人は何も言わず、俺の足を掴む手を強める。

「いや、起きてるね!2人とも!」

「バレた!45姉!」

「うん、9!」

「うわっバカヤメロオ!」

そんなに引つ張られるとバランスがあ!倒れるわけには、倒れるわけにはいかない!

「うづ(づ)づ(づ)づ(づ)」

全腹筋背筋をつかつてバランスを保つ。倒れるわけには……まだ眠っているG11の上に倒れるわけには……

「残念、私も起きてるよ」

もう、耐えたよね……。もう倒れていいよね……。

なあG11……首元を引つ張るのは卑怯だよ。

俺が布団に倒れ込むのに、それほど時間はかからなかった。いや、首元に抱きつくな!45と9も腰を掴むな!

「416!」

「いまだよ!」

45と9がそう言うと、背中に衝撃がくる。

よつん這いで正面にはG11がいる。45と9は腰に抱きついてきてるし、どうやら416が背中に乗っかってるみたいだ。

「いくよ9ー!」

「わかったよ45姉!」

「君ら俺の動きを封じて何をやる気? いや、待て、45ちゃんに9ちゃん、横腹はヤメ、ヤメロオオオ!」

この後笑い疲れるまでくすぐられ続けた。

||*||*||*||*||

「暇だね〜」

「そうだね〜」

雨が振り続いていて、部屋の中もジメジメしている。でも……風上の方は晴れているから、そのときに買い物でも行こう。

「ねえお兄さん」

背後から突然416が話しかけてきた。話しかけてくるのは珍しい。

「ん? どうしたんだい416ちゃん」

「なにか嫌な予感がするの」

「嫌な……予感?」

「そう、なにか良くないことが——」

416の声は大きな音にかき消された。ズドーンと言う音は空気を震わせる。その後も何度か鳴り続ける。

「か、雷か。随分と近いなあ」

窓の方を見れば、キレイに稲妻が見えた。

「えっと、その」

「ん? 416ちゃんもしかして雷は苦手?」

416の手は俺の服の裾をギュツと握っている。

「そ、そういうわけじゃな——」

416の言葉は途中で止まった。窓の外が光ったからだろう。少

し遅れて大きな音が響き渡る。

「ひ、ヒイツー！」

いや、怖いんだね。いいいいいよ、お兄さんに任せなさい。ああでも服の後ろが伸びそうだ。まあ部屋着だから構わないけれどね。

再びズドンと近くに落ちる。これは停電の可能性も考慮しておく必要があるそうだ。

「お、お兄さん……」

「45ちゃん？」

「か、かみなり、ズドンって……」

45もうさぎのぬいぐるみを抱きしめながら416の反対側……つまりは俺の正面から突撃してくる。まいったな、最近身動きが封じられがちだ。あぐらをかいているから、すぐに動けなかった。

ピカつと外が光り、すぐに音が聞こえる。どこからか消防車のサイレンすら聞こえてくる。

「……どうしたの9ちゃん？」

「お兄ちゃんってさ……」

またピカつと外が光る。

「実は雷苦手？」

直後、ズドンと音がする。

「ままま、まさかそんなわけないじゃないか」

「でも落ちる度に身体がビクってなってるよ？」

「そんなわけ……っ！」

また落ちた。ああ、たしかに苦手だよ！でも雷の怖さというより、爆音が苦手なんだよ！

「そういう9ちゃんは楽しそうだね」

「えっ？楽しいじゃんいつもと違ってさー！」

9は目をキラキラさせながら窓に張り付いている。元気だな……これが若さか。

「これが若さかって顔してるよ」

「G11ちゃん……は平気そうだね」

「さすがに怖がるような年齢じゃないよ。それにコレくらいの音、慣

れてるし」

そう言いながら、G11は大きくあくびをした。

「何もできなさそうだし、私は寝るね」

G11はおもむろに近づいてくると、俺の膝を枕にして寝息を立て始めた。いや、動けへん。さらに動けなくなつたやん。

「ずるーいー！じゃあ私は逆側！」

そういつて9は逆側の膝を枕にして寝転がった。うおん、俺はまるでフルアーマー404だ。なんてくだらないことを考えるくらいしかできなかつた。

さあ俺の足に限界がくると停電と、どっちが先か勝負しようじゃないか。

ピカツズドオオオオン！

部屋の照明が消える。勝負は案外と早く決着がついたのだつた。

第十三話 想像通りだ

「晴れたら〜!」

「9ちゃん、転ばないようにね」

9が道をかけて行く。どうやら雨ばかりで退屈してたみたいだ。毎日外で遊びたいってタイプなんだろうなあ。

「お兄ちゃん!早く〜!」

道の先から9がそう叫んでくる。まったく、若いなあ。俺もそんな老けてるわけじゃないけどさ。

「足元に気をつけるんだよ!」

「うん、分かった!」

ああ、そう走ると……ほら、水たまりに突っ込んだ……。

「足元を見ないから……まったく」

「あはは、ごめんなさ〜い」

タオルで汚れた足を拭いてあげる。こんな細い足でよく動き回るなあ。

「よい……しよつと」

「ちよつと9ちゃん、何をしているんだい?」

「肩車!」

「肩車か、よろし」

もってくれよ!俺の足腰!

「わー!たか〜い!」

9はどうやらお気に召したようで、キョロキョロとあたりを見回してるようだ。楽しそうだなによりだよ。

「ねえねえお兄ちゃん」

「ん?何だい?」

「ありがとう!」

「ははは、どういたしまして」

お礼も言えるなんて偉いなあ。ほんと、その一言が言えるまま大人になるんだよ、9。

「……あれ?お兄ちゃんあれ見て」

「あれは……雨雲？」

そういえば雨の前にする特有の匂いもする。早めに帰らなきゃいけない。流石に濡れたくはない。

「少し急ぎうか」

「うん、わかった！」

9を肩車したまま、早歩きする。これは明日に響きそうだ……。

※※※※※※※※

少し買い物長引いたのだが、幸運なことにまだ雨は降っていないかった。

「お兄ちゃん、荷物1つ持つよ」

「ああ、ありがとう」

それじゃあこのお菓子たちを頼んだ。軽いし大丈夫だろう。

「それじゃあ帰ろっか」

「うん！」

9は元気よく頷くと、また走り出す。

「急いで帰ろう！雨が降る前にさー」

9がそう言って振り返った瞬間だった。

ザー……ッ！

バケツをひっくり返したかのような土砂降りが始まった。

「やべえ降ってきたー！」

「お兄ちゃん急ぐよ！」

食品が濡れるだとか水溜まりで足が濡れるとか考えている場合じゃねえ！このゲリラ豪雨はひどすぎる。幸い、家までもうすぐだ！

「ただいま！」

9の元気な声が玄関に響く。

「9！大丈夫だった！」

パタパタと部屋から出てきたのは45が一番早かった。

「うん！でもビショビショになっちゃった」

「ほら、拭いてあげるから荷物下ろして」

濡れたままの買い物袋が玄関に置かれ、9はそのまま風呂場へと連れて行かれた。

「おかえりなさい。はいタオル」

「ただいま、416ちゃん。ありがとう」

416が持つてきてくれたタオルで簡単に買い物袋を拭いて、それから自分の足を拭く。

「お兄さん、今日は肌寒いからお風呂で温まった方がいい」

「そうだね……」

今日はやけに気温が低い。連日の雨に加えての曇り空で空気が冷えてしまっているみたいだ。

「よし、9ちゃん！お風呂に入っているよー！」

「えっほんと!?!」

こういうときのために常に清潔にしているのだよ。まあ最近416ちゃんが勝手に掃除してたりするけれど。

「じゃあさー！」

9ちゃんが脱衣所からひよっこり顔を出す。

「お兄ちゃんもいっしょに入ろうよ！」

さすがにまずいのでは？

|| ** || ** || ** || ** ||

全指揮官に告ぐ。ワレは悪くない。ワレは何も悪くない。たとえ同じ湯船に9がいて、よりかかられるとしても、俺は悪くねえ！

そう、仕方がなかったんだ。涙目で9に

「お兄ちゃんは私と入るの嫌？」

ってせがまれたから仕方がなかったんだ……。

「ふんふくん」

「ご機嫌だね」

「だってお兄ちゃんとお風呂だよ！楽しくないわけがないじゃん」

目の前で頭の上のお団子が揺れる。普段のツインテ9もいいが……このお団子9もいい……。諸兄姉、ここが天国だ。俺は一足先に天国に行ってしまったみたいだ。

「ねえねえお兄ちゃん」

「なんだい9ちゃん」

「最近雨ばつかでつまらないね」

「そうだね。9ちゃんは外で遊ぶのは好き？」

9は元氣よく頷く。

「うん！でも45姉とか416ちゃんとかG11ちゃんとかと遊ぶのも好き」

「そっか……」

どこか外に出かけるのもいいかもしれない。探してみるか。

「じゃあ今度、皆でどっか出かけようか」

「ほんと!？」

9がバっと立ち上がってこっちに振り返る。

「じゃあ私45姉たちに言ってくるー」

そのままバタバタと風呂から出ていってしまった。

うん、はしゃぐのはいいけど恥じらいを覚えようか……。

||*||*||*||*||

「お兄さん、遅い」

「ごめんねG11ちゃん」

風呂から上がると、G11がパソコンの前を占拠していた。その隣は9と45が、後ろから覗き込むように416がパソコンを見ている。

「何を見ているんだい？」

「ここらへんの観光地」

確かに上から覗き込んで見れば、ここらへんの観光地をいくつかタブで開いている。

「どこか行きたいところがあるのかい？」

「うん！私と45姉はここ！」

そう言っ指差したのは、公園だった。広い公園で、動物がいたり遊具があったり、花壇があったりと盛りだくさんだ。少し遠く、電車移動になるだろう。

「私はここにいききたいかな」

次にG11が見せてきたのは、滝だった。家からはたしかに近いが、歩いて行く距離でもない。これはバスだな……。

「意外だね、G11ちゃんはインドア派だと思ってたよ」

「あついや……えつとそうなんだよ」

目が泳いでいる。まあ、滝のマイナスイオンを浴びながら昼寝したってところかな。リクライニングできるアウトドアチェアの通販サイトも開いているし。

「それで、416ちゃんは？」

「私は別に……それよりお兄さんは？」

「自分とはとくにないからいいよ。どこにも行きたくないって訳じゃないんだらう？」

なんとなく416の行きたいところは想像できていた。きつと静かな場所で、夜か夜のような暗さがあるところだな……

「じゃあ……この水族館」

そういつて416は画面を指差した。

うん、ピッタリだ。

第十四話 こつちを見るその日は何？

「すごいー！ひろーいー！」

「待って……9……！」

公園に入るなり9が目の前のはげしい芝生を走り回る。45も心なしか声が陽気がかっている気がする。

「お兄ちゃんも早くー！」

「ああ、今いくよ」

俺は後ろを振り返る。そこには右手にバスケットを持ってトテトテと歩いている416がいる。その左手は、しっかりとG11の手を握っている。

「何ですかお兄さん」

「楽しみだね」

「まあ、そうですね」

そうクールに言う416も、さつきまでは鼻唄混じりに歩いていたんだぜ……可愛いだろ？

ここまでの移動は電車だった。ずっと眠りっぱなしのG11に変わって俺が全員の面倒をみなきやならんのは疲れたが、まだまだ一日はこれからだ。

「ねえお兄ちゃん！」

「どうしたんだい9ちゃん」

先に行っていた9が唐突に振り返った。

「楽しいね！」

満面の笑みを浮かべながら、9はそう言う。

ああ、すでに楽しい。準備して、みんなまで移動して、そしてみんなまで公園に到着した。それだけで、十分楽しい。でも……

「まだ公園に入ったばかりだよ。もっと楽しいことがたくさんあるさ」

「うん、楽しみ。アレなんだろう？行こう、45姉！」

「う、うん」

9と45が遠くへ行ってしまいそうだ。でも416から離れるわ

けにもいかない。

「いいよお兄さん。9ちゃんも45ちゃんに付いて行って」

「いいのかいG11ちゃん？」

「私だって子供の面倒くらいみきれよ」

少し不安だが……子供2人だけでどこか行く方が不安か。

「わかった、任せたよG11ちゃん」

「うん、任せてよ……フワア、ねむっ」

G11が大きなあくびをした。やっぱり不安があるが、今は9と45を追いかけるのが先か……。

※※※※※※※※

「あはは！お兄ちゃんこっちだよ！」

「そう簡単には……捕まらないよ！」

「はあ、はあ、待ってくれえい！」

子供の体力は化け物か!?延々と走り回ってまだ疲れ知らずだなんて、これが若さか。いや、俺も十分若い部類に入るけれども。

「鬼さんこちらー！」

「お兄さんの黒歴史ノート第一章ー！」

ちよつと待って45が手に持っているあのブツは……

「45ちゃん、どうしてそれを持っているんだい？」

「私も持つてるよ、第二章」

「9ちゃんまで!？」

「ばらまかれなくなかったら」

「私たちを捕まえて？」

ふーん、大人げないと思ってセーブしていたが……どうやら本気を出す時が来たようだ。

「9ちゃん、45ちゃん……大人との差っていうのを思い知らせてあげるよ」

「あはは、怖い」

「でも、私と9の両方を捕まえることなんてできるかな？」

やってやるーじゃねーか！

「行くぞー！」

「わーっ！」

「逃げろー！」

この後、俺が息切れするまで走り回ったのは言うまでもないだろう。もちろん、勝敗は負けだった。俺……弱すぎ？

「あー走った走った！」

「さすがに……疲れた」

しばらく走り回ったり遊具で体を動かした後、2人とも満足した様子で駆け寄ってくる。

やれやれ、もう太陽はてっぺんを少し通り過ぎちまったようだ。気温も随分とあがってきた。

「よし、お昼にしようか」

9と45の手を引きながら、416とG11のいる木陰へと足を向けた。

|| * || * || * || * ||

木陰では、案の定横になつて寝息を立てているG11がいた。416はそのすぐ側で座り、本のページをめくっている。そばに置かれたコップには、カフェオレが注がれていた。

「遊びは終わりですか？」

「ああ、十分動いたかな。そろそろお昼にしようか」
「ええ」

416は大事そうに側に置いていたバスケットを開く。9と45は、我先にとその中身を覗き込んだ。

「わー！サンドイッチだ！」

「他にも一杯……」

バスケットの中には、色とりどりの料理が並んでいた。朝早くから起きて俺と416で作った自信作である。

「美味しい！すごいよお兄ちゃん」

「いいや、俺じゃないよ」

実際、この豪華な弁当を作ったのは俺じゃない。俺は指示通りに手伝っただけだ。

「これは416ちゃんが作ったんだよ。ほぼ1人でね」

9と45の視線が俺から416へと移動する。その視線から逃れるように、416は顔を逸らした。

「すごい！416ちゃんこんなにいっぱい作ってくれたの！」

「すごい……わ、私にも今度教えて！」

「う、うん」

「ほんと……!?!」

「じゃあ私も！私も料理する！」

「それじゃあ、私が試食役をしようか」

「G11さんはそろそろ料理できるようにならないといい人を見つけられないよ？」

「ぐっ、416ちゃん痛いところをつくね……」

あはは、4人とも仲が良さそうで何よりだよ。こんな尊い空間にいられるか！俺はフェードアウトさせてもらおう！

「お兄ちゃん？」

「私たちの……料理」

「全部食べてくれますよね？」

もってこれよ、俺の胃袋！

ああわかったよ！全部残らず美味しく食べてやるさ！

「料理……睡眠……そうか、料理上手な彼氏を捕まえれば……」

ボソボソ呟きながらG11が何かを思いついたようだけど、俺は何も聞かなかったことにした。

第十五話 容量よ、持ってくれ

「見てみてお兄ちゃん、インコだつて！」

「ははは、インコだね」

「あつち、モルモットだつて！」

「9ちゃん、楽しそうだね」

お昼を食べ終わったあとに向かったのは、動物園のスペースだった。パンフレットを見る限りだと、思ったよりも多くの種類の動物を飼育しているようだ。

「うん！ほら、いこつ45姉。あつちに孔雀がいるんだつて！」

「待って、9……」

おつと白鳥に迫られて45が固まっているぞ。まずは一枚パシヤリ。

「見よ、これが財力だ！」

近くの自販機で買った餌で、白鳥を一本釣りだぜ。

「……あれ？」

白鳥のやつ、俺の手と45とを見比べて……45の方を向きやがった。

「ふえ……お兄さん……助けて」

ああまったく、どうして白鳥は餌につられないんだ！まったく……あれ？45の手に俺のと同じものが握られてるな……

「45ちゃん！それ投げて！」

「……！ナイン！」

「45姉ナイス送球！」

思いつきり投げた先には9がいて、その餌をアクロバティックにキャッチする。

もちろん、白鳥は餌をキャッチした9をじつくりと眺めていた。

「へへ、とれるもんならとってみろー！」

「9ちゃん危ないから投げて！」

「大丈夫だよお兄ちゃん！」

ああ、白鳥が羽を広げて9に突っ込んで……

……つつこんで跪いた？

「えへへ、いい子いい子」

9は右手で餌を与えながら、左手で白鳥に触れている。

「45姉もおいでよー！ふわふわしてて気持ちいいよー！」

「えっと……」

45も恐る恐る近づいて、その羽根に手を飛ばす。さすがに人馴れしているようで、白鳥が暴れる様子もない。

「お兄ちゃんもおいでよ」

「お兄さん、この子のさわり心地すごくいいよ」

やれやれ、お呼びとあらば

俺は一枚パシヤリと写真をとって、白鳥に近づいていった。

※※※※※※※※

「416……ちゃん……？」

「なにかしら」

「そんなに興味があるのかい」

「まあ、そうね」

416が足を止めたのは馬のスペースだった。数種類の馬が、柵の中で放し飼いにされている。そんな中、416は柵にしがみつくようにして見つめている。

「……G11ちゃん、416ちゃんのこと頼めるかい？」

9と45が少し先の方へ行ってしまっている。しかしここで416を一人おいていくことはもちろん、無理をいって一緒に次の場所へと向かうのもできればしたくない。

「うん、わかったよお兄さん」

不安でしかないが、今は大人なG11を信じるしかないか……。

あれ、デジャヴユな気が

「お兄さん？早くいかないと9ちゃんと45ちゃんが」

「わかったよ。頼んだからね！」

近くのベンチに座り込むG11を横目に、俺は9と45の後を追っ

た。

「見てみて45姉！モルモットだって！」

「……かわいい」

小さな小屋をもそもそと動くモルモットを、二人は窓から覗き込むようにして見ていた。

確かパンフレットによれば……あと数十分後にはふれあい体験があるな。少し回ったら戻ってくるか。

「ねえ45姉、あっちにはフラミンゴだって！」

「あつモルモット……」

9はすぐに次の場所へと走って行ってしまった。45はモルモットと9と見比べている。

「45ちゃん、あとでまた来ようか」

「お兄さん……うん、わかった」

45は安心したかのようにパンフレットを握って、9の手の振る方へとかけていった。

まったく、手のかかる姉妹なこと。

他にも数種類みたあと、416のいたエリアへと戻ってきた。もう少ししたらモルモットとのふれあいの時間も始まるから合流しようとしたのだが……

「ど、どうしようお兄さん……416ちゃんがいなくなった」

「……えっ？」

俺たちを迎えてくれたのは、珍しく眠たさげな表情が見られないG11だった。

||*||*||*||*||

「くそっ見つからないか」

動物園の園内を回っても、416の姿は見つけられなかった。

「すみません、ここにこのくらいの小さい子が来ませんでしたか？」

「いえ、来てませんね。迷子ですか？」

迷子センターを兼ねている本部に行っても、416は見つからなかった。本部の人はすぐに無線をつないで、各所のスタッフに連絡をし始めよう。

「お兄さん……ごめんなさい、私が目を離したから……」

「いや、G11ちゃんは悪くないよ。それに416ちゃんが勝手にいなくなるような子ってわけでもないし」

だが、嫌な予感はしなかった。誘拐だとかなんだとか心配するべきなんだろうけど、そうじゃないってどこかで思っていた。というよりもそう願っていたのかもしれない。

「すみません！迷子を探してたのはあなたですか!？」

スタッフの一人が息を切らしながら近寄ってきた。はいと肯定すると、ついてくるように言われる。

案内されたのは、馬の厩舎だった。

「ああ、こんなところにいたんだ」

そこには、馬の寝床ですやすやと眠る416がいた。

「すみません！この子、キラキラとしたものが好きなもので、その子を連れてきちゃったようで」

馬の頭を無理やり下げながら飼育員さんも深々と頭を下げる。

「いえ、いいんです。無事のようにすし」

それに、416の髪はたしかに光をよく反射して煌めいている。

ほっと安心したのも束の間、時計を見れば想定以上に過ぎている。

「ふれあいの時間は終わっちゃったか」

「そ、そんな……」

45の手に力がこもる。残念だが今日はまだまだ行くところもある。諦めてもらうしか……

「ああ、モルモットとのふれあいですか？それでしたら……」

飼育員さんはいくつか連絡をとりあうと、こちらに向けて笑顔を向けてくる。

「今回は特別に開放しましょう。迷惑をおかけしましたし」

「えっそんなお手数をおかけしてさらにそんなしてもらうなんて」

いえいえ、大丈夫ですという飼育員と、期待するかのように裾を掴んでくる9と45。それから目をこすりながら起きた416を見て俺は肩を下ろす。

「すみません、それではお言葉に甘えさせてもらいます」

このあと、写真フォルダがあふれるくらいにモルモットと皆を撮りまくった。

第十六話 あと数本手があつたらなあ

辺りが暗くなり始めたころ、俺たちは公園をあとにしていた。

「見てみてお兄ちゃん！水族館だ！」

9が45の手を引っ張りながら、入り口に向かおうとする。待て待て、早まるな。まだチケットを買ってない。

「大人二人子供三人お願いします」

「はい、どうぞ」

金を支払ってチケットを受け取ると、416と手をつないだG11にチケットを二枚渡した。

「ごめんG11ちゃん、416ちゃんは任せました！」

「……わかった、なにかあつたら連絡する」

あれ……？電話番号すら教えた覚えはないんだが……G11のスマホには俺のLINEが映っている。まあ細かいことはいいや。

俺は入り口で係員に止められてる二人の茶髪コンビに、急いで駆け寄っていった。

※※※※※※※※※※

「わあ……綺麗……」

暗い水族館内で子どもたちはてんわやんわ動く。何度分身したいと思つたことか……

45はまだいい。問題は9のほうだ。目を離れた隙にすぐはどこかに行っている。そんな9でも、足を止めるのがいくつかあった。

薄暗い空間を、水槽の中を照らす光が照らす。ゆっくりと流れる水槽内を、クラゲが漂っていた。45のペースに合わせてようやく追いつくと、9はその水槽の前でかじりつくように眺めていた。

「あつ45姉！見てみて！」

「なに？」

「自分で光るクラゲだつて！ほら！」

先程の水槽の隣に、小さな水槽がある。どうやら珍しいくらげがい

るようだった。俺は二人の様子を眺めながら、大きな水槽の向かい側にある椅子に座る。程よい暗さ、静かなBGM、絶妙な空調……

「お兄さん?」

「……、はっ!」

やばい居眠りしかけてた。見れば45が心配そうに顔を覗き込んできていた。

「9ちゃんは?」

「9なら先にいっちゃった」

「そうか……」

迷子にならないといいんだが……、9なら大丈夫かな。

「ほら、お兄さん。早く行こう?」

「ああ、わかったよ45ちゃん」

珍しくも45がせかして、腕を引っ張ってくる。この先はたしか……パンフレットを見れば、珊瑚礁のコーナーだった。

||*||*||*||*||

珊瑚礁のコーナーは、とても広くつくられていた。45はその一つ一つの水槽を、丁寧に見て回る。

「……45ちゃん?」

そんな中でも、最もとどまった時間が多かったのはカクレクマノミの水槽だった。

「クマノミが好きなの?」

「うん……なんか、ほっとする」

安心する場所を求めてるってことなんだろうか。たしかに実家には十数日も帰っていないわけだし、軽いホームシックになっているのかもしれない。おばさんに連絡をいれておいたほうがいいかもしれないな。

「……、お兄さん?」

「ああ……、そういえばそろそろペンギンのショーがあるね、行こうか」

「うん……」

45と手をつないで、9を探す。少し行ったところで、亀とにらめっこをしていた。ペンギンを見に行こうというと、9は目をキラキラさせながら俺の手を引き始める。

「つと……ちよつとまっつてふたりとも」

「ん？」

「どうかしたの？」

「いや、416ちゃんとG11ちゃんにも連絡をしておかないとね」

メッセージアプリを立ち上げると、ペンギンのショーを見に行くことを伝える。すぐに既読がついて、すでに場所をとっていると返ってきた。

「もう行ってるみたいだ。よし、行こうか」

二人に引つ張られるようにして、ペンギンがいるフロアへと向かった。

※※※※※※※※※※

ショーが終わりペンギンが寢床に戻っていくまで、ちびっこ3人は終始興奮していた。G11ですら、眠たそうな顔をしてはいるものの、目はしっかりとテクテク歩くペンギンを凝視していた。

「すごかったね！すごかわいかったね！」

「一番、はじつこの岩に乗ってた子が、こうキョロキョロって」

「そのあと係員さんから逃げたりして——」

その後も三人は興奮して話しっぱなしだった。ペンギンのかわいさにまさに夢中といったところか。

「お兄さんも楽しめた？」

「G11ちゃん……、もちろんさ」

「なら良かった。ちよつと疲れてそうだったから」

ペンギンのフロア近くの水槽を眺めていると、G11が隣に寄ってきた。

「G11ちゃんはどくだい？」

「ん？ちよつと眠いかな」

「いや、そうじゃなくて。今日は楽しかった？」

「何言ってるの兄さん」

G11はにへらあと笑った。

「お楽しみはこれからでしょ？」

「えっ？」

「イルカショーもまだだし、その前にある大水槽でのショーも面白そうだよ？」

「へえ、意外だな」

「……、それってどういう意味？」

すこしムスツとした顔をしたG11にあわてて弁明する。

「ごめんごめん、普段はいつも眠たそうにしてるからさ。こういうしたことにも興味がなかったらどうしようってずっと考えてたよ」

「そりゃ私だって女の子だし、こういう雰囲気のあるところは嫌いじゃないというかなんというか」

「ん？どういふことだい？」

「……、な、なんでもない。それよりほら、次のショーの場所取りしてくるから！」

やけに慌てて向かっていったなあ。ラブコメとかだったらきつとG11は顔を真っ赤にしてるんだろうけど、まあそんなことはないか。

それに、416ちゃんの世話まで放棄していきやがった……。俺の手は二本しかないんだぞ……。？ああ、ほら。取り合いが始まった……。

第十七話 俺が起きとかないとな……

左手を45、右手を9、そして服の裾を416に握られるというフルアーマー状態の俺は、大水槽の前まで移動してきていた。

「お兄ちゃん！ はやくはやく！」

「はやくいきましよう、お兄さん」

「待ってくれよ……」

急かすUMPシスターズに手を前に引かれ、マイペースに歩く416に服を後ろに引かれる。

「あっお兄さんこっちこっち」

大水槽の前でG11が手を振っている。まだ十分ほどショーまで時間があるというのに、すでにベンチはもう一杯だった。G11もバッグをつかってなんとか二人分ほどのスペースは確保できているくらいだった。

「詰めればギリギリ座れるかな？ 俺は空いてる二階のスペースにいるよ」

そういつて俺はG11にすべてを任せて行こうと思ったが……三人は離してくれなかった。

「ねえ、お兄ちゃん」

「お兄さんがG11さんの隣に座れば」

「スペースの問題は完璧ですよね？」

「ど……どういふことだい？」

困惑してる間にも、俺はぐいぐいとG11のほうへと運ばれていく。

「ほら、まずお兄ちゃんが座って？」

9のいうとおりに、G11の隣に腰掛ける。

「そして、私と45姉が」

素晴らしいながら、45と9が俺の太もものにのっかってくる。416は既にG11を椅子代わりに座っていた。

その後のショーは大水槽を活用した素晴らしいものだったが、それ

よりも両脚の上でもぞもぞする二人の動きがくすぐったくてそれどころではなかったのは言うまでもない。

※※※※※※※※

「お兄さん？」

「ん？ どうしたの45ちゃん」

まだ行っていない水槽を回っていると、45が俺の手を握ってくる。

「大丈夫？」

「うん？ ……大丈夫だよ」

「そう……良かった」

疲れてるとでも思ったのかな？ 優しい子だ。

「なに話してるの？」

先に行っていた9が戻ってきて、45とは反対の手を握ってくる。君たちナチュラルに手を繋ぐようになったね……。まるでそこが定位置かのように……。

「ううん、なんでもない。それより9、どこまで行ってたの？」

「お土産屋さん！ あのね！ こんな大きいぬいぐるみがあつて」

小さい手を精一杯伸ばしながら説明する姿はとても可愛らしいのだが、少し待ってほしい。もしやその大ききのぬいぐるみをねだる気か……？ その大ききはウチの家には大きすぎるぞ……？

「9、そんなに大きくても困るだけでしょ？」

「ううん、言われてみればそうかも？」

45は賢いなあ。それに9は45の言葉を一番よく聞くから、本当に助かる。

「それでしょ？ お兄さん」

「えっああそうだね」

「ちゃんと話聞いてた？」

「ごめんごめん」

考え事をしていて、あまり聞いていなかった。

「えっと、ぬいぐるみだっけ？ いいよ、好きなものを買って。みんなで一つずつね」

「ほんと!？」

9がくいついてくる。45も、嬉しそうにしているのが隠しきれていなかった。目がキラキラしている。

「シヨップはイルカショーのあとにも空いてるからその後でいい？ そのほうがゆっくり買い物できるから」

「うん」

「わかった」

二人とも、ぬいぐるみのことを話しながら、イルカのブースへと歩いていく。

「ねえお兄さん」

「G11ちゃん?」

だいぶ後ろにいたはずの416とG11が、いつの間にか真後ろにまで来ていた。

「ぬいぐるみって私もいいんだよねえ?」

「君は大人だろうに……まあいいよ」

幸い、お金なら十分にある。思い出の品として買うのもいいだろう。

「お兄さんは何が好きなの?」

G11の手をにぎる416がそう尋ねてくる。好きな動物か……。

「イルカとか?」

「イルカさん……」

そう聞くやいなや、416はG11を引っ張り始める。

「ちよっどうしたの416ちゃん」

「早く行かないと」

「まだショーには時間があるだろうに」

気を使わせちゃったかな? 子供にそうさせるなんて、俺はまだまだだな。

「416ちゃん、急いで転んでも意味がないから慌てなくていいよ」
「でもお兄さん、イルカが」

「ああ、好きだよ。でも416ちゃんが怪我するのは嫌だな」

「……わかった」

「よし、えらいね」

髪を崩さないようにポンポンと頭を撫でる。416ちゃんはちよつとうつむきながらG11の後ろに隠れてしまった。

「お兄さんさあ」

「ん？」

「やっぱなんでもない」

G11の言葉に疑問符を浮かべてしまう。ため息をつくことはしてないと思うんだが……。

「それより、二人が待ってるんじゃない？」

いつのまにか、先を行っていた45と9の姿が見えなくなっていた。

「ごめんG11ちゃん、任せるよ！」

「はいはい」

早く行けとばかりにひらひらと手をふるG11に見送られながら、僕は二人を追いかけた。

※※※※※※※※

再び45と9と合流し、水槽を回る。なんとか、イルカショーまでには余裕を持って回り切ることができた。

「楽しみだね！」

「うん」

ふたりとも、いまかいまかとそわそわしっぱなしである。

「あついていた」

G11と416も無事に合流した。416が少し回るペースが遅かったから心配したが、聞いてみればじっくりと全部見てきたらしい。間に合つてなによりだ。

時計を見れば、もうすぐ始まる時間だった。

「お兄ちゃん早く早く！」

「9ちゃん入ったら危ないよ」

「このくらい大丈夫だよ！ ほら、早くしないと電車が行っちゃおうよ？」

「大丈夫だよ、まだ次の便がある」

ショーが終わってからいままで、ずっとお土産屋さんで足止めをくらっていた。というのもショー終わりで客が混雑していて、なかなか会計が終わらなかったのだ。

まあその成果といえば、俺の両手がぬいぐるみさんたちの詰め込まれた袋で塞がれていると言えればいいだろうか。45と9と416、それからG11になぜか自分の分まで買ってしまった。何の飾り気のなかった部屋がにぎやかになりそうである。

「なんとか乗れた〜」

G11がへ口へ口になりながら座席に座り込む。さすがに俺も疲れが来ている。

乗ってから出発してまでの数分は皆楽しそうに今日の思い出を語っていたが、少しすれば電車の揺れも後押ししてか寝息を立て始めた。二人座席に45、9、416という感じで座り、それぞれの肩によりかかりながら寝てしまっている。

「まったく……電源が切れたみたい寝るね。……、G11ちゃん？」
隣から返事が聞こえないと思っていると、肩に重みを感じた。

どうやら、大きな子供がもうひとりいたようだ。

第十八話　こんなに広がったかな

「おはようー！お兄ちゃんー！」

お腹に重みを感じて、目が覚める。見れば9が俺のお腹の上ののっかって満面の笑みを浮かべていた。

「おはようッ」

いつもどおりだそうとした声は、ひどいくらいにガラガラ声だった。

「あれ？お兄ちゃん？」

「ああ、ごめんごめん」

9をどかして、近くの棚に手をのばす。すぐにマスクをして、体温計を手にとった。

ピピピツピピピツピピツ

不思議そうにこつちを見つめる9をなだめながら数分待てば、体温が測り終わる。

「……G11ちゃん」

「ん……どうしたのお兄さん」

布団からのっそりと起き上がって、眠たそうに目元をこすっている。

「どうやら風邪をひいたみたいだ。全員退避」

「了解」

少ない言葉数で理解してくれたようで、すぐに9と45を抱えて部屋から出ていった。こういうときははっきり動いてくれるのがG11のいいところだ。

「あれ、おにいさ——」

扉をあけてきた416が、ずるずると後ろに引きずられていった。今日はさすがに子供とは距離をとらないといけない。

「お兄さん、とりあえず私の部屋に入れてきたよ」

「ああ、ありがとうG11ちゃん」

感謝を告げながら、僕は着替える。

「ちよつとお兄さん！何をしてるの！」

「病院に、いかないとね。伝染病だと困る」

「私もついていくよ」

「いいや、みんなの面倒を頼むよ」

「でも……」

俺は靴をはいて鍵をポケットにしまう。

「大丈夫だよ。そんなに熱も高くないからね」

「わかった。もしなにかあったらすぐに連絡してね」

「うん。じゃあ行ってくるよ」

俺は部屋を出て通路を歩く。

ふと気配を感じて後ろを見れば、3人がぴよこりと部屋から顔を出していた。

「ちよつと病院にいつてくるよ。いい子にしているね」

皆がコクリとうなずくのを見て、満足して俺は病院へと向かった。

||*||*||*||*||

「あー、風邪ですねえ。一応薬をだしておきますので薬剤師の説明をうけておいてください」

やる気のなさそうな医者メガネをくいくいとさせている。

普通の風邪でよかった。昨日は普通に皆と一緒に寝ていたから、変な病気をうつしてしまっていたら大変だっただろう。

「お大事にー」

すこしぼーつとする意識を振り払いながら、薬局から出る。少し財布には痛手だったが、はやめに治さなければいけないという謎の使命感が俺をかりたてていた。

「いらっしやいませ〜」

近くのコンビニによって、スポーツドリンクなどをかごに入れていく。

「おっと」

「うわっ」

ふらついた拍子に、ちょうどすれちがった人にぶつかってしまった。

「すみません」

「ごめんごめん、あたかも見てなかったよ」

そう笑う女性は、本当に気にしていなさそうだった。

「大丈夫？すこし顔色が悪いみたいけど」

「ああすみません。風邪を引いてしまったみたいで」

「そうなんだ。お大事に」

「いえ、ありがとうございます」

随分とフレンドリーな人だ。ひらひらと手をふると、その人は店を出ていった。

「お会計〇〇円になります」

お札を適当に出して、俺も会計を済ませる。熱が上がってきたようで、すこしぼーつとしていた。

「ありがとうございます」

外に出れば、重たい湿気が身体にまとわりつく。額にかいた汗を拭いながら、帰路につく。

「ただいま……」

返事はない。当たり前だ。皆は今頃G11の部屋のほうにいるはずだった。

いいしれぬ感覚に襲われながらも、俺はかっってきたスポーツドリンクを口に含んだ。すこし濃いめの味が舌に残って気持ちがるかつた。

がらがらと扉をスライドさせれば、いつもの布団がおりたたまれ、かわりに一人用の布団がしかれていた。普段はしまっているテーブルが出されていて、その上には水とお粥が置かれていた。お粥はまだ湯気を立たせていたので、ありがたくいただくことにした。

「これは……、416ちゃんかな」

もはや慣れてきた味に、ほっとため息をつく。きつとタイミングを

見計らって置いていってくれたのだろう。

「おかえり、お兄さん」

「G11ちゃん」

「ただの風邪だった？」

「ああ、ごめんね」

「いいよ。ほら、食器回収しに来たんだから早く食べ終わってよ」

「……、そのじーつと見られるとむず痒いんだが」

「いいから」

「ハイ」

もぐもぐと食べているあいだも、G11はずっとこちらを見つめてきていた。

「ごちそうさまでした」

「どうだった？」

「ん？ああ、美味しかったよ」

「……、そう」

しばらくもじもじとしていたG11は食器を片付けていった。

「ほら、はやく横になって」

「ああ、ごめん」

「ありがとうでいい」

「えっ？」

G11は、次はしっかりとこっちを見て言う。

「ごめんじゃなくてありがとうでいい」

「ああ、ありがとう」

「うん。それにいつもいろいろとしてくれるのはお兄さんの方だし」

飲み物などを枕元に用意してくれる。

「それじゃあ、くれぐれも勝手に起きたりしないでね」

そういいながらG11が部屋から出ていく。しばらくすれば、隣の部屋の扉がしまった音がした。

こう、一人でこの部屋にいるのが久しぶりで、なぜだかとても広く感じてしまった。

第十九話 無意識って怖い

「完全快復ー!」

熱もない、喉も鼻も治った。さすがの治癒力だ。といっても、熱を出してから3日ほどかかっているのは内緒である。久々のほぼ一人生活は寂しさこそ感じたものの、免疫力が低い子供にうつすわけにはいかない和我慢した。

「お兄ちゃん!」

部屋の扉がバタンと音をたてて開いたかと思うと、一番のりで9が飛び込んできた。全快しているとはいえ病み上がりに君のタツクルを受けると……くる……

「お兄さん。もう大丈夫?」

「ああ、45ちゃん。いい子にしてくれてありがとうございます」

「うん、お兄さんがすぐに良くなってよかった」

45の頭を優しくなでると、まるですりつけるかのように目を細める。なんだかんだで人肌恋しかったのかもしれない。

「416ちゃんもありがとう。おかゆ美味しかったよ」

「お兄さん、あれ作ったの私じゃない」

「えっ?」

416はやれやれと首を振った。

「あれはG11さんがつくってたの」

なるほど、食べた時に感想を聞いてきていたのはそういうことか。ようやく違和感がわかった。

「じゃあ後でお礼を言っておかないとね」

「それより早くいい?」

9が服を引っ張っていく。今日は近くのショッピングモールに出かける予定だった。

「G11ちゃんは?」

「もう少しかかるって」

「そうか……じゃあもう少しゆっくりしていこうか」

L―NEでもう少ししてから行くと連絡して、布団を干す。換気を

すれば、夏の新しい空気が室内を満たす。

「今日もあついね〜」

9が両手に荷物を抱えながら戻ってくる。あちらの部屋に退避させていたゲーム機やおもちやだ。

「お兄ちゃん！しゅぎようしたから一回やろ？」

「はは、こんどは負けちゃうかもなあ」

差し出されたゲーム機をテレビに繋いであげれば、9は慣れた手付きで設定を終わらせる。

その後、対戦格闘ゲームで勝ってしまった9が再戦をぐねるのは、わかりきっていた未来だった。

||*||*||*||*||

「あーまた負けた！お兄ちゃん強い！」

「9、こういうときは……」

「そうだね45姉！」

何をする気だおまっちよっ

「45ちゃん！」

「だーれだ」

目を小さな手で覆われて、視界がほとんどない。そしてスピーカーから聞こえる体力を削られる音。

「9ちゃん？」

「あ、あと少し……！」

「9……早く……」

俺は一気に立ち上がる。きっと子供の腕力なら耐えきれずに手を離すだろうとたかをくくっていた。

「ひゃあー！」

「45姉！」

その予測は間違っていないなかった。たしかに45は目から手を離した。しかし、見込みがあまかった。

離された手は反射的に首に巻き付くように強く握られ、立ち上がった

た身長差で俺は首を後ろの方へと引っ張られる。

つまりは、しっかりと首が絞まっていた。

「う、ぐぐぐ」

「ああー負けちゃうー!」

「9……も、もう限界……」

9のキャラの体力を消し飛ばした後、俺はすぐに座って息を吸い込む。

「はあはあ……し、しんどかった……」

そんな俺には脇目も振らず、9はコントローラーをおいて45の方へとかけよる。

「45姉……45姉!」

「9……勝負には勝てたの……?」

「ごめん……負けちゃった……」

しゅんとなっている9の頭を、45は優しく撫でる。

「いいの……。9が元気ならそれで」

そうつぶやきながら、45はゆっくりと目を閉じていく。

「45姉?45姉……!」

「強く……なるのよ……」

いや、俺は何を見せられているんだ?この学芸会ではトップまちがいなしの二人の子役はいつたい?

ぴこんという通知音が俺を現実に戻す。G11からのメッセージだった。

「よし、G11ちゃんも準備できたみたいだから行こうか」

はーいと元気よく返事をする、それぞれポーチを持って外に出る。俺も出て鍵を閉めると、ちょうど隣の部屋の扉も開く。

「あっお兄さん」

「G11ちゃん、ジャストタイミングだね」

「うん……」

「ああ待つて！」

大事なことを忘れてる。

「鍵、閉め忘れてるよ」

「えっあつほんとかだ！あ、あれ鍵ない、おいてきた？あれ？」

慌ててポケットやトートバッグの中を探るG11だが、どうやら見つからないみたいだ。

「はあ、まったくもう」

それを見かねて416がすすると部屋の中に入り、すぐに出てくる。

「はい」

「あ、ありがとう」

恥ずかしそうにG11が笑い、416はあきれつつも撫でられる手に頭をすりつけている。

「それにしてもよくすぐに見つけたね」

「べ、べつに部屋の中で見た事がある場所を探しただけ」

「それでもすごいよ」

416はじつと見つめたあと、そつとうつむく。そして俺に頭頂部を見せたまま、固まってしまった。

……なぜか変な空気になってきたな。

「お兄ちゃん、多分撫でてほしいんだと思う」

9がコソコソと教えてくれてようやく理解する。

「ああ、ごめんごめん。よし、すごいね」

416の頭をなでると、先程のように気持ちよさそうに目を細めた。なんとというか、まるで犬か猫の相手をしているようだと思ったのはここだけの話だ。

「それよりお兄さん、バスの時間が」

「ん……？」

腕時計を見ると、ギリギリの時間になっていた。

「ほらー急いでお兄ちゃん！」

9が走って先行し、45と416もそれに続いて走っていく。

「ああ！転ばないようにね！」

「うん！」

元気よく返事をして、3人ともバス停へと走っていった。

「よし、行こうかG11ちゃん」

「え！ああうん」

G11は、ほぼ無意識に差し出した俺の手を優しく握り返してきた。

第二十話 特別編 別に惚れたってわけじゃないんだからね

「おい！ちようどよかった！」

昼食を終え、食堂から次の講義に向かおうとした時だった。サークルでいつもよくしてくれている先輩の声に俺は振り返る。

「おまえ、今日暇か？」

「暇って……、まあサークルの後はないですけど」

「よし、これでラスト一人確保だ。おい！見つかったぞ！」

先輩は吹き抜けから上の階へと叫ぶ。すると先輩の同級生たちがひよっこりと顔を出した。

「おいおい、大丈夫かよそいつ」

「あれじゃ、イチオシの後輩とかいってた奴じゃろ」

「いいんじゃないの？どうせ数合わせだ」

口々にそんなことを言われる。

「あの、先輩。いったいなにが」

「バーカ、決まってるだろ？合コンだ。一人足りなくてなく困ってたんだよ」

「困ってって。一人くらいいいんじゃないですか」

「今回ばっかしはそうも行かねえんだよ！」

そう言いながら先輩は写真を見せてくる。

「WAちゃん、お前らの学年の高嶺の花！あっちが連れてくるらしいんだ。なのにこっちの人数揃わなかったらカツコつかねえだろ？」

「は、はあ……」

「まあそういうことだから頼んだぜ！」

「は、はい……」

今晚の地獄の晩ご飯が決定した瞬間だった。

||**||**||**||**||

その日は講義が始まった後もあまり落ち着かなかった。いや、落ち着かないのも仕方がないだろう。何故だか今日に限って、俺の前に例のあの子が座っているからだった。

WA。物静かで美人で、まさしく高嶺の花を体現してるような子だ。普段から大人びた振る舞いでいるためか、言ってしまうえば話しかけづらい。もちろん女友達はいるらしいが、話の中心に登ることは少ないのかいつも輪の隅の方で静かにしている。

「じゃあテストの模範解答だ。点数が高い生徒の答案を貸してもらった」

教授がスクリーンに映し出した解答は、名前こそ隠されているものの、きつと今日も彼女のものだろう。成績もズバ抜けてよく、こういった成績に絡むことなら基本的に彼女が一番上にいた。

「まさしく模範つてところだな。むしろ分かり易すぎるくらいだ。皆もこのくらい勉強するように。それでは今日は以上だ」

まあここまで書き連ねてなにが言いたいのかというところ……

この大学に彼女と釣り合う男は存在しない。

ナンパや呑みの誘いで玉砕したという男は数知れず、女同士ですらあまり行かないという話もある。

講義が終わってボサボサと片付けていると、WAさんが立ち上がる。ワインレッドの眼鏡を外してケースにしまうと、突然その場にしゃがみこんだ。

「これ、落としてますよ」

「ん？ああ、ありがとうございます」

そう言っただけに何かを手渡すと、教室を出て行ってしまった。

俺はしばらくその後ろ姿を見つめた後に、受け取ったものを見る。それは小さくなった消しゴムだった。残念ながら俺のものじゃあない。きつと近くに落ちたていたから俺のだと勘違いしたのだろう。

まあ縁起はよさそうだと、俺はポケットにそれを突っ込んでから荷物片付けた。

サークルの終わりに、先輩が一方的に肩を組んでくる。

「逃げなかったな」

「逃げるわけないじゃないっすか」

「いやー、WAちゃんがくるってことだしビビるかなってな!」

「ビビりはしませんけど……、あっちはどういう集まりなんですか」

「仲良しグループってだけ聞いてんな」

「じゃあWAさんのいるあのグループですかね」

講義でよくいる中心タイプのグループだ。とくにリーダーの子はよく彼氏を取っ替え引っ替えしていると聞かし、きつと先輩たちに目当てがいて組んだんだろう。対価にWAさんと呼んでまで。

「どうだ。お前から見て可愛い子はあるか?」

「まあ皆可愛いと思いますよ」

「はあ……それだからおまえは」

「……?どういうことですか?」

「つまりはだな、目当ての子はいるのかってことだ」

「いえ、とくに」

今日は本当に付き合いだけだ。そりや彼女の一人でもできれば大学生活は変わるだろうけれど、今日のメンツでは一歩引かざるをえない。

先輩たちはまあ言っ飛ばせばモテる。おそらくあっちのグループは俺に目なんて向けないだろう。

「お前そこはWAちゃん持って帰りますくらいなあ」

「ははは、自分には無理ですよ」

「わかんねえぞ? ああいうタイプは実は前からとか言い出すんだ」

「やけに押してきますね」

「まあおまえにとられるのはシャクだから俺も狙っていくけどな」

そういう先輩は、まあ言ってることはアレだが見てくれはいい。これはワンチャンあったりするのだろうか。

などと考えていたら、店についてしまった。もうすでに他のメンバーは中にいるらしく、個室へと案内される。

「いやー遅れてすまんね、片付けに時間かかったわ〜」

「おいおっせ〜ぞ〜」

先輩が軽い口調で部屋に入っていくのに続く。やはり女性陣のメンバーは想像どおりだった。

「じゃあ適当に席替えするか〜」

のりの軽い男がそう言っつて、女子側の提案によって誕生日順ということになった。

どうやら偶然というのはあるらしい。夏という早い時期にも関わらず、俺が一番はやい誕生日だった。そして対面——つまりは俺の次に誕生日がはやい人は、WAさんだった。

「あ、ども」

WAさんは無言でコクリと頷いた。今日の講義で見た時と服が変わっている。どうやら少し気合が入っているようにも見えた。

「それじゃあ飲もうか！すみませ〜ん」

先輩が店員を呼んで皆アルコールを頼んでいく。俺はとりあえず先輩たちに合わせて生ビールを、女子側は適当に軽いサワー系を頼んでいた。

「私ホワイトサワーで！WAちゃんは？」

「わ、私も同じものを」

グループの中心核の女子に聞かれて、WAさんは慌ててそう答えていた。アルコールに弱いなら隠すこともないだろうに……。なんだかこうかわいそうに思えてきた。きつとある程度無理に誘われたに違いない。

「じゃあかんぱ〜いー！」

グラスを鳴らす。とりあえずグラスの生ビールをグツと飲み込んだ。独特の苦味が、舌をしびれさせる。

WAさんもちびちびとグラスの中身を消費していつていた。

料理が来るとともに、皆の談笑の声も一層大きくなる。アルコールの飲み放題のため、次々にアルコールが運ばれてくる。はじつこの席にいる俺は、無駄にたくさん頼まれたアルコールが流れてくるものだから、ついついのみすぎてしまっていた。

「う、うう……」

「WAさん？」

「い、いや、大丈夫。まだ酔ってない」

「そ、そう……」

少し頬を赤らめてはいるけれど、まだ意識はしっかりあるようだった。

「よし、席替えてことのでいっこ隣にずれよー！」

いつのまにか流れでそんな話になったようだった。反時計周りにズレるとなると、俺は対面の席へと移動しなきゃならなかった。そしてつまりはだ、つまりはさつきそこにいたWAさんの隣に座るということになるというわけで……

「あの……大丈夫……？」

「うー？ぜんぜん酔ってない、酔ってないんだかりや」

あきらかにフラフラし始めたWAさんと、何度か身体がぶつかる。香ってくるほどよい香水の匂いが、アルコールで鈍った鼻にもよく効く。

「ほら、水のんで」

「だいじょうぶだもん」

いつものクールさはそこにはない。もはやだだをこねる猫のようだった。

「WAちゃん大丈夫？」

「ほらお茶お茶」

周りもWAさんの異変に気がついたのか、視線があつまりつつあった。

「だ、だいじょうぶっていつてるでしょー！」

そういつて目の前のグラスを一気に飲み込んだ。目の前におかれ
ていた、俺のみかけの、赤ワインを。

「あの……WAさん？」

グラスを傾けた姿勢で固まっている。

「ヒック」

固まった場に、一人のしゃっくりが響く。言わずもがなWAさんの
である。

「帰る」

突然、WAさんは立ち上がる。しかしアルコールが想像以上にま
わっているのか、ふらりと身体が揺れる。

「あぶない」

つい反射的に身体が動いて、WAさんをささえる。WAさんは俺の
腕を支え代わりにして、そのまま外に向かおうとしている。

「ううん……帰る……帰るんだから……」

「まったく……おい、送ってってやれ」

「俺がですか？」

先輩はため息をつきながらそんなことを言う。まあ、たしかに腕を
掴んできているこの手は、なかなか離してくれそうにもない。

「でもWAさんの家知らないですし」

「近いし……自分で帰る……」

そうはいいいながらも、掴む力が緩むことはない。顔はムスツとして
いているものの、腕に顔を擦り付けて離してくれない。どこかで見た
ことがあると思っただが、出かける主人を離さない猫にそっくりだ。

「ああもう……、じゃあお先に失礼しますね！」

二人分以上のお金を適当に先輩に握らせて、ぐいぐいと引っ張るW
Aさんに促されるがままに店を出る。夜風にあたると身体が急に冷
えて、アルコールでぼうとしていた頭がはつきりしていく。

そして冷静になるにつれて、今の現状を再認識し始める。お持ち帰
り……という判定に入るのか？いや、というか何だこの香る匂いは。
香水だけじゃない。なんだか別のなにかを感じる。

「ん……こっち……」

引つ張られるようにして住宅街の方へと導かれる。

「ごん」

「は、はあ。ここかあ」

そこには想像以上に大きいマンションがあった。エントランスに入ると、受付の男性が深々と頭を下げる。

「WA様、お帰りなさいませ」

「うん……ただいま」

少し照れくささを隠すように、WAさんは俺の後ろに隠れてグイグイとエレベーターホールへと押ししてくる。

「ああ、お連れ様」

「ん？俺ですか？」

「なにかご入用の際はフロントまでお電話ください」

「……、ここってホテルでしたっけ」

「いえ、これは個人的なサービスですので」

「ど、どうも……」

よくわからないがお金がかかっていることはわかる。育ちの良さは節々から感じていたけれども、どうやら想像以上の金持ちのようだった。

「WAさん、何階？」

「2階」

2階なのにエレベーターをつかうのかという言葉をグツと抑えて、ボタンを押す。エレベーターが上昇を始め、すぐに停止する。

「ごつち」

すこし酔いがさめてきたのか、WAさんは自分でしっかりと歩くようになってきた。しかし俺の袖をクイクイと引つ張るのでしょうか、なく着いていく。

「少し散らかってるけど……入って……」

「いやいや、俺はもう帰らせてもらおうよ」

「いいから……」

袖を引つ張る力が強くなってきたので仕方なく部屋にお邪魔する。綺麗に片付けられた、シンプルな部屋だった。

靴を脱ぎ捨てたWAさんは今度はしっかりと腕を握って引つ張ってくる。俺も靴を脱いで、引つ張られるがままに奥の方へと進んでいく。

後ろでカチャリと、自動で錠がかかる音がした。

「うう……」

「WAさん？」

「眠い……、おやすみ……」

そういつて、ベッドに身を投げ出す。そう、俺の腕を掴んだまま。

「あの……」

声をかけた頃には、もうWAさんは寝息を立て始めていた。寝ているだろうに、俺の腕を離さないどころか、手に頬を擦り付けてくる。

「猫だ」

俺はそうつぶやいて、ベッドに座り込む。芳香剤の香りが、だんだんと頭をリラククスさせていくのを感じ取っていた。

アルコールも十分にまわっている俺が、睡魔に勝てるわけもなかった。

|| * || * || * || * ||

パチリと目を開ける。知らない天井だ。

右手に柔らかく温かい感触を感じて、そちらを見る。

目を細めてすりすり頬に俺の右手を擦り付けている誰かさんと

目があう。

「あの……えっと……おはよう？」

「なっ……」

どうやら彼女も寝ぼけていたらしい。目を見開いて、顔が急速に真っ赤にそまっっていく。

「なんでここに……」

「そりゃWAさんに引つ張られたからですが」

「あっ……たしかに昨日……てことはどこまで夢……？」

「へっ？」

「ああでももう今さらよねもう後にも引けないし」

「あの……WAさん？」

「ふふ、ふふふ」

なんだかぐるぐる目で迫ってくるWAさんは、なんだかこう恐怖を感じた。

「そ、それじゃ俺はここらで失礼！」

急いでベッドから飛び起きて、バタバタと玄関へと向かい、靴のかかとを踏んで扉に手をかける。

ガチャガチャ

ところがどういふことか、鍵が開かない。

「私にあんだけのことをさせたんだから……責任とりなさいよね」

「いや、何も、何もしてない気が」

「うるさい！いいから私の言う通りに彼氏になりなさいよ！」

頭の中をハテナが埋め尽くす。

「いや言う通りになってそんなことは何も」

「えっ……えっ？」

真っ赤な顔がさーつと青くなっていく。赤くなったり青くなったり忙しい顔色である。

「ちよつとまってるください。そういえば夢だとかなんだとか言っちゃったよね？いったい夢の中で俺が何したっていうんですか」

「えっそれはその……」

こんどは恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「ま、とりあえず俺は帰りますね」

そういつてまたドアノブに手を掛けるが、鍵は解除されない。

「鍵は開かないわ」

「な、なんで？」

「私が遠隔でロックしてるから」

WAさんの方を見れば、右手に握り込んでいるものがある。

「あの、帰りたいんだけど？」

「私の彼氏になるなら開けてあげる」

「え？ええ……」

「ねえ、どうするの?」

「一応聞いときたいんだけどさ」

「うん」

「彼氏にはならないっていったらどうなるの?」

「彼氏になつてくれるまで帰さない」

だめだ、話を通じる気がしない。

いや、でも考えてみれば、大学1の美女からの告白を受けているんだ。これは喜ぶべきことなのか?と、とりあえずここは……

「わかった!彼氏になるよ。俺でいいなら」

「本当に?よかった」

うしろでガチャリと音がする。本当に鍵を解除したようだ。

「が、学校では内緒にしてよね!」

「ああ、わかったよ」

もうわけがわからない。とりあえずはやく自宅に帰りたい。帰った俺は、てきとうに返事をしてその場を逃げるように去った。

||*||*||*||*||

滑り込むように講義室に入った俺は、その数分後には頭を抱えていた。

たしかにWAさんはいつもどおり、そしてこれまで通りだった。しかし周りがそうではない。明らかに情報が漏れている。明らかにこちらを見ながらコソコソと言われるのは気分が良いものではない。

講義が終わってから逃げるように講義室を出ると、たまたま先輩にすれ違う。

「おっ!」

「先輩、こんにちは」

「おまえ、やったなあ!」

そっくりながらボンボンと背中を叩いてくる。

「あの、先輩。何がですか?」

「何ってそりゃあ……WAちゃんと付き合うことになったんだろ?」

「あの、それどこから聞いた情報ですか？身に覚えが」

「なに、とぼけんなよ。本人から聞いたぞ」

「はっ……えっ？」

「そもそもあの合コンだつてそもそも……おつと」

「先輩？」

「なんだ、めずらしく満面の笑みなんか浮かべて」

「ちよーつとお話聞かせてくださいねえ」

「やだなー。じゃあ次の講義に行くかー」

「先輩、昔の彼女さんに連絡しましょうか？」

「ハイナンデモハナシマス」

つまりは、昨日の合コンはWAさんと俺とをくつつけるために企画されたものであり、主催は女性陣グループのリーダー、隠れた恋心を後押しするために俺にけしかけたと。

「まあ……そういうことかと思いましたよ」

「……、別れるのか？」

「……、どうでしょうか」

すぐに別れたいというほど嫌いというわけでもない。そもそも、いままですごい学校の表面上のWAさんしか見ていなかった。きつと彼女は、もつとよく話して、感情的で、そしてクールと言うよりかはかわいい方な気もする。

「ならばしばらく付き合ってみろよ。そこから考えるんだ」

「彼女を何人も乗り換える先輩の言う言葉はためになりますね」

「うっ、おまえってそんなに毒舌だったっけか」

まあすこし強めにでもあたらないとわりにあわない。

突然、スマホが震える。見れば、WAさんからのメッセージだった。

「連絡先教えたのは俺じゃないからな！じゃあなく！」

そういつて先輩は逃げていつてしまった。

ため息をつきながらアプリを開くと、つまりは昼食のお誘いだった。

た。

「別に来なくてもいいって……、しかたない。いくか」

これは突然俺にできた、素直じゃないのにベタベタに甘えてくる彼女の
女のお話。

||*||*||*||*||

「ねえ、暇ならお茶しない？」

「そんな時間とらせないからさあ」

ああ、面倒だ。このような容姿だからか、よくこういうのに絡まれる。今回ののはひととき面倒なタイプの人種だった。冷たくあしらおうにも、離れてくれそうにない。

「ごめん！その人たち避けて！」

突然、ナンパ男たちとの間に自転車が急ブレーキをかけながら割り込んでくる。

「あつぶね！いやーすみませんすみません」

「てめえ！」

「あぶねえだろ！」

「いや、ほんと、怪我なくてよかったす！すみませんすみません！」

ペコペコと頭を下げる自転車の持ち主に、ナンパ男たちは唾を吐き捨てながらどこかへ言ってしまった。

「君も怪我がないみたいでよかった」

そういつて手をさしのべた彼は、どこかで見覚えのある顔だった。たしか同じ大学の……、それ以上の情報は持ち合わせていない。

その大きな手を借りて立ち上がると、私は汚れた服の土を払う。

「あぶないじゃない、少しは前を見て運転することね」

そんなふう強い言葉をかけても、彼は申し訳無さそうに頭を下げるだけだった。

「本当にごめん。っと急いであるからじゃあね！」

そういつて自転車にまたがると、すぐに全力でどこかへと向かっていった。

それが、私が彼を認識した最初の日だった。

その日、講義室の真ん中の方で「講義の時間一時間間違えて早く来ちゃったわ」なんて友達と談笑する彼を、無意識に目で追っている自分が見えた。

第21話 こりや長引きそうだ

ショッピングモールは、今日もやたらと人が集まっていた。夏休みのためか、特に子連れの客が多い。

そして、そんな子連れの客の一组が、俺たちである。

「お兄ちゃん！あっちの店いこー！」

「お兄さん、あそこのパンケーキ……」

「今日の晩ごはんの食材……」

「わかったわかった！順番に回ろう？」

いつもどおり9と45に手をひかれて、服の裾を416に掴まれている。

「……、G11ちゃん？」

そういえば先程からG11の声を聞いていない気がする。きよろきよろとあたりを見回せば、ベンチに座り込んでいた。

「G11ちゃんはどこか行きたい店はある？」

「……」

しかしG11は何も答えない。不思議に思っていると、9が走って行ってうつむいている顔を覗き込んだ。

「お兄ちゃんダメみたい、完全に寝てる」

「G11ちゃん！起きてくれ！ここで寝ないで!？」

「ふえっ？あっおはよう」

「おはようって……まったく、ほら行くよ」

「うん……ごめん」

差し出した右手を、G11は控えめに握り返してくる。

「あー、お姉ちゃん私の場所〜！」

「あつ9ちゃんごめんねすぐにどくから」

「えへへ、いいよ。そのかわりお姉ちゃんの右手は私のね！」

そう言っつて9はG11の右手を掴む。つまりは4列横隊になったということだ。

「いや、横に幅を取りすぎだよ」

つないでいた手を離して、G11の後ろにつく。しばらく俺とつな

いでいた左手を握ったり開いたりを繰り返した後、すこしムスツとした顔でこつちに振り向く。

「お兄さん、私も買いたいものがあるの」

「G11ちゃん？」

「来てくれるよね？」

「……、ハイ」

なんとなく無言の圧力を感じて、そう答えてしまった。でもまだおやつの中には時間があるし、食材の買い出しも荷物になるから最後でいいだろう。

「それでG11ちゃん、買いたいものって？」

「あれ」

そういつて指差した方向をたどる。

「あれって……あのバッグの店かい？」

「ううん、その隣」

「文房具屋か」

「逆」

「……、まじで？」

※※※※※※※※※※

「お兄ちゃんこれどう？」

「ああうん、似合ってるよ」

「お兄さん……私にはどれがいいかな……」

「45ちゃんはそうだね、これとかどうかな」

「お兄さん、私これに決めた」

「416ちゃん？もう少し待ってね」

気まずい。すごく気まずい。いつもどおり子供に囲まれているのはもう慣れたことなのだけれども、今の状況はすごくよろしくない。

横を通り過ぎていった女子高生が、チラチラとこつちをみながらコソコソと話をしている。まあそうだろう。そんな子供を持つような年齢にも見えない男が、女兒用の水着売り場にいるのだ。まだ子ども

たちがしよつちゆう話しかけてくれるから助かっているけれど、もはや通報ものではないかと思ひ始めてる自分がある。

「あのお兄さん」

「ああ良かったG11ちゃん！」

この場を預けて退散しようと声の方向へ振り返る。

振り返った俺は、そのままフリーズした。

「あーえつと………に、似合う？」

服の上から、少し大胆な水着をあわせたG11がそこには立っていた。さすがに恥ずかしいのか、頬を赤らめている。

「あの……お兄さん？」

「はっーごめんごめん、似合ってると思うよ」

「じゃ、じゃあこれにする………」

そのままレジに直行するG11を見送りつつも、子供たちの水着をかごにいれる。なんとか間に合った。

「ああ、これもお願いします」

G11がお金を出すまえにかごを差し出して、会計をもつ。

「そんな、私の分は私が払うのに」

「これも必要経費でしょ。感謝は俺じゃなくて叔母さんや416ちゃんのお父さんにね」

支払いを済ませて、袋詰めを待っている間に残金を確認する。さすがに足りなくなってきた。別行動をしてお金を引き出しにいったほうがいいかもしれない。

「お兄ちゃん！私が持つ！」

「そうかい？じゃあお願い」

元気に立候補する9に袋を任せて、まだ申し訳無さそうにしているG11に多めにお金を渡す。

「まだいろいろ入用だと思うから先に買い物しててくれるかい？」

「えっ……？お兄さんは？」

「ちよつとお金をおろしてくるだけだよ」

「わ、わかった。任せて………」

なんだか不安だ。そう思つて416の方を見ると、やれやれと首を

振りながら45と9の手を握った。

「416ちゃんも、任せたよ」

「お兄さん、早くもどつてきてね」

「うん、すぐにね」

そう言つて皆が別の店に向かうのを見送る。確かここの一階にATMコーナーがあつたはずである。階段を下つてしばらく歩く。

「げっ、まじか……」

今日に限つて、人だかりができている。そういえばと今日が休日であることを思い出す。子連れからご老人まで、多種多様な人がATMに列をなしていた。

「さすがに時間がかかりそうだ……」

俺はG11に連絡をとつてから、その列に並ぶ。しかし全然進まない。長引きそうだとスマホを眺めていると、天気予報が流れてくる。

「しばらくは晴れか……。いい川遊び日和になりそうだ」

熱中症対策もしっかりしていかないといけないだろう。俺は買い物リストに、いくつか対策用品を加えてからスマホを閉じた。

第22話 我慢も身体に毒

「G11ちゃん、今どこだい?」

ようやくお金を下ろしてから、電話を試してみる。どうやら水着売り場の近くにまだいるようだった。

「わかった、もう少ししたら向かうからそこにいてくれる?」

返事を得てから、ため息をつく。

今、俺のズボンは小人に掴まれていた。

「あの……、どうしたんだい?」

「お兄ちゃんだれ?」

こつちが聞きたい。この少女、突然掴んできて離そうとしない。もちろん無理やり振り払うこともできるだろうが、それで泣かれたらどうしようもない。

「お母さんかお父さんは?」

「いな〜い」

デリケートな問題が発生した。なんでこんな地雷級の幼女から捕まってしまったんだ俺は。

頭の中では、子供たち3人に振り回せるG11の幻影が助けを求めてきていた。

「よし、じゃあここに詳しいお姉さんがいるところにいこつか」

「ヤダ」

うー……ん? どうしろというのだろうか。迷子センターに押し付けようにも、この幼女はその場から動こうとしない。

「お兄ちゃん困ってるの?」

そうだね君で困ってるよ。なんて言えない。

「私が助けになつてあげる!」

それはありがたい。じゃあぜひ迷子センターに行ってもらいたい。

残念ながら今日は混雑してる。俺に暇があればこの子の保護者を見つけてもいいんだけど、難航しそうだ。

それに、皆を待たせている。残念ながら暇もない。

「お兄ちゃんはさ、好きな人いる？」

「どうしたの唐突だね」

「いいから答えて！」

好きな人……、好きというのがよくわからないけれど、いわゆる恋人候補ってことなのだろうか。

「いないならウチのおねえのお嫁さんにしてあげる！」

「うん、言うならばお婿さんだね。僕は男だよ」

「そんなこといいから！」

「いないと思うよ」

「よかった！早くおねえに会わせないと！」

大変な家庭なんだろうなあ。父も母もおらず、こんな小さい妹と姉だけ。懐に入ってるお金が自分のものだったら思わず渡してたくら
いだ。

「おねえ！」

「もー！どこ行つてたの！」

幼女が大声でそう呼ぶと、通路の奥からズンズンと速歩きで誰かが
迫ってくる。

「おねえ！見つけた！」

「なにを？」

「お嫁さん！」

口を開けて固まったまま、その女性は俺の方に視線を向ける。い
や、そんな目で見ないでくれ。

「あれ、どこかで会ったことあるっけ？」

「ん？」

女性がじーっと見てくるもんだから、思わず視線をズラした。

「わかんないや。それで、あたいの可愛い妹に何の用？」

「それはこっちのセリフなんですがね。まあお姉さんが見つかったみ
たいで良かったです」

「そうみたい……だね。迷惑かけてごめんね？」

「いえ、元気でいいじゃないですか」

「変なこと口走ったりしなかった？」

「うん……まあ大丈夫でした」

「ねえねえおねえ」

「もう、お嫁さんなんていうから驚いたじゃん」

「だって」

「だってまあさつてもありません」

「むーっ！」

「ほら、行くよ！」

「ごめんねとペコペコしながら、女性は幼女を引きずっていった。まるで嵐のような姉妹だった。」

※※※※※※※※※※

「あ、お兄さん」

「G-1ちゃん、ごめん待たせたかな」

「うんにゃ、みんなまだ遊んでるし」

子供たちは皆、おもちゃ売り場のぬいぐるみコーナーにかじりついていた。なんとというか安定してわかりやすく助かる。

「よし、そろそろ15時か」

そう言ってみると、おそろしい勢いで3人ともこちらに振り向く。特に45なんかは、溢れんばかりの期待に満ちた目をしている。

「入り口付近にあったパンケーキ、食べるにいく？」

返事はここで語るまでもないだろう。

数分後、頼んだパンケーキの大きさにあたふたしながらも夢中で頼める子供3人プラスαをながめつつ、俺はコーヒーを啜るのだった。

「お兄さんはパンケーキよかったの？」

「ああ、まあ気になりはしたけど……」

最初こそは勢いよく食べていた3人だったが、先程からあまり進んでいない。やはり子供からしたらこのパンケーキは大きかったようだった。

「なるほどね」

「G11ちゃんは良かったの？」

G11ならきつと食べるだろうと思っていたんだが。甘いものも好きなほうだったはずだし。

「わ、私は今日はいいよ」

そういいながらも、G11はチラリと水着のはいった袋を見た。なるほど、まあ女の子だし気にするのも仕方ないか。

「お兄ちゃん……」

「ん？9ちゃんどうした？」

「ごめん。お腹いっぱい……」

「ああ、いいよ。残りは俺がもらおうかな」

「ありがとう！」

9から皿を受け取ると、45と416も恥ずかしそうにこちらを見る。

「二人もかい？」

「うん……」

「ごめんなさい」

「次からは食べる量を考えて注文するんだよ？」

「コクリと頷いたのを見て、二人からも皿をもらう。」

「しっかし、3皿かー。少し多いかなあ」

少しわざとらしく隣を見れば、じっと皿の上のパンケーキを見ているG11がいる。

「G11ちゃん」

「あつうん何？」

「俺だけじゃ少し多いから手伝ってくれないか？」

「えっ」

「俺も食べ過ぎると晩ごはんが入らなくなるからさ、頼むよ」

「うん、しょうがないなあ」

そういいながらも、G11は満面の笑みでパンケーキを頬張るのであった。

第23話 やわらか低反発枕

バスが去っていき、俺ら4人だけがその場に取り残される。別に置いていかれたというわけではない。ここが今日の目的地だ。

「すつごい音！滝があるんだっけ」

「待って、まずは着替えて」

「いいから416ちゃんも早く！」

9に引つ張られるように416が連れて行かれる。置いていかれないように俺たちも滝へと向かうことにした。

滝は思っていた以上に大きく立派だった。見上げるほどの高さから水が落下して、水しぶきが遠くまで飛んできて涼しい。

「お兄さん？」

「45ちゃん？9ちゃん達と一緒に行かなくていいのかい？」

「お兄さんお昼の準備するよね？手伝う」

助かる……んだがせっかく遊びに来たんだ。

「まずは遊んでからだ」

※※※※※※※※※※

「うわあ、お兄さんびっしょびっしょじゃん」

「あはは、まあね」

まさか3人からジェットストリームアタックを仕掛けられるとは思わなんだ。おかげで濡れる予定のなかった上半身や髪までびっしょりだ。

「とりあえず椅子だけは出しといたよ。はいタオル」

「ありがとうG11ちゃん」

タオルで頭を拭いていると、ドンと下半身にぶつかられる。

「9ちゃん？」

「お腹すいた！」

「そうだね、じゃあお昼の準備しようか」

お昼と聞くやいなや、体が冷えないようにタオルを羽織っていた4

16が動き出す。彼女が到着までずっと大事そうに抱えていたバスケット、その中には今日のお昼ごはんがたくさん詰めこまれている。

「今日も416ちゃんが？」

9がそう尋ねると416は首を横に振る。

そう、今日は珍しく俺も手伝った。といっても簡単な部分だけで調理自体はほとんど任せっきりだったけども。

「お兄ちゃんが!？」

「まあ少しだけね。この量はさすがに手伝わないといけなかったよ」

張り切って用意しすぎた気もするけれど、皆育ちざかりだし、残しても今日の晩ごはんに回るだけだ。

それに……

「うわあ!たくさんだ!」

「何から食べようかな!」

45と9がキラキラとした目でバスケットの中を覗き込んでいる。量は正義だ。この笑顔が証明だろう。

「さあ、たべようか」

「うん!いただきます!」

「いただきます」

皆があまりにいい食べっぷりをするからついつい笑顔が伝染る。

「はいお兄さん、お茶」

「ありがとう。G11ちゃんもほら、食べなよ」

「うん、いただきます」

ちよびちよびとおかずをとって、食べている。おにぎりには手をつけずか。

「G11さん」

「ん、なにかな416ちゃん」

「おにぎりも食べてください」

そういつて416がおにぎりをさしだす。さすがに申し訳ないとおもったようで、恐る恐るといった風におにぎりを頬張る。

すこし具材多めのかしわ飯のおにぎりだ。俺を除いて全員女の子ということ、食べやすいようにサイズは小さめである。

「うん、おいしい」

G11ちゃんは頬張りながら笑顔になる。どうやら口にあったよ
うだ。

どうして俺がおにぎりに詳しいのかって？そりゃ俺の数少ない『手
伝い』の一つがおにぎりを握ることだったからだ。

||**||**||**||

食事を終えて少しまた遊び、荷物の方へと戻る。

「お兄さん交代してこよっか？」

「いい？じゃあ頼むよ」

G11に皆のことを任せて、シートの上に寝転がる。木漏れ日が気
持ちよくて、すぐに寝てしまいそうだった。

クーラーボックスから缶ジュースをとりだすと、なにやらじーつと
見つめてくる視線を感じる。

「……、いるかい？」

「ありがとー」

謎の少女に缶ジュースを渡すと、トテトテと走り去っていった。首
をかしげながらもう一本だして、プルタブを引く。炭酸飲料特有の音
を楽しみながら、クーラーボックスを椅子にして中身を飲み込む。

「随分と美味しそうに飲むんですね」

「416ちゃんも飲んでみる？」

いつの間にか戻ってきていた416にクーラーボックスから同じ
ものをとりだしてあげる。

「んん……炭酸は苦手」

「そうか」

残念だ。真夏の炭酸教に新たな信者かと思ったがだめだったみた
いだ。

「遊び疲れたのかい？」

「少し……」

416はころんとレジャーシートの上に寝転がる。よく食べてよ

く遊んだからだろうか。寝息を立て始めるのは明らかだった。

「あれ？416ちゃん寝ちやったの？」

「ん？ああ」

少し経つと、G11が45と9を連れて戻ってくる。

「は〜いっばい遊んだ！」

「っ、つかれた」

45と9もレジャーシートの上に寝転がって、しばらくすると寝息をたてはじめる。二人とも、限界だったみたいだ。

「G11ちゃんは大丈夫？」

「そんな子供じゃない。でも少し疲れたかな」

3人とも仲良く固まって遊んでくれるとはいえ、面倒みるのは短時間でも大変なものだ。

「お兄さんも疲れてるでしょ？寝てもいいんだよ？」

「……10分くらい寝ても？」

「うん、いいよ」

なんだかんだで俺も疲れがたまってるみたいだ。寝転がって目をつむると、眠気が急激に襲ってくる。

なにやら頭の後ろに柔らかい感覚を覚えたが、それが何であるのか確かめる前に俺の意識は夢の世界へと旅立っていつてしまった。

第24話 転ばぬ先の

なんだか懐かしい夢を見ていた気がする。

たしかこれはまだ俺が小学生だった頃だ。

家族で、川に遊びにいった日だ。家族ともアウトドアな方ではなかったから、よく覚えている。

その日は数日前に雨が降った後で、まだ子供だった俺には急で危ない流れになつてる箇所もあったんだったつけ。

その日、岩場に足をぶつけた拍子に転んだ俺は流れに身をのまれて
……

「お兄さん？」

「……」

夢はそこまでだった。変な汗をかいており、心臓がバクバクと鳴っている。見下ろしてくるG11ちゃんの顔を見て、ただ居眠りをしていただけだと認識する。

「大丈夫……？」

「ん、ああ大丈夫だよ」

起き上がって伸びをすると、川の周りの冷えた空気で頭が冴えてくる。上から見下された？ あるいは先程まで後頭部に柔らかいものがあつた気がする。枕なんて持ってきていない。ということ……

「ごめん」

「えっ？」

「重かつただろう？」

頭でつかちとはよく言われたもんだ。レジャーシート一枚の上で膝枕だなんて、足がしびれただろう。

「……そうじゃないと思うんだけど」

「ん？ 何かいったかい？」

あまりにボソリと呟くもんだから水の音にかき消されて聞こえな

かった。

「ああ、そういうえば」

言うべきだろうし、言うなら今だろう。

「水着、似合ってるね」

「えっ……」

少し緑がかった水色の水着が、上から羽織っているパーカーからのぞいていた。髪色も相まってとてもよく似合っていると思う。

「その……ありがとう」

少し照れくさいな。川に飛び込んでこようか。

などと考えていると、側で寝ていた子供たちが起き始める。

「お兄ちゃん？おはよう」

「おはよう。よく眠れた？」

「うん！また川で遊んできていい？」

9は元気にそう言っているが、45と416はまだ眠そうだ。

「G11ちゃん、少し遊んでくるね」

「い、いってらっしゃい」

頬を赤くしたままのG11に二人を任せて、9に手を引かれるままに川のほうへと歩いていく。日はてっぺんを過ぎてはいてもまだ高く、川にキラキラと反射された光が眩しかった。

「ねえ！見てみて！」

9が川に入って、その小さな手で水をすくう。中には、逃げ切れなかった小魚がぐるぐると回っていた。

「へへっ、すごいでしょ！」

「すごいね」

俺も試しに狙ってみるが、小魚はすいすいと手のひらから逃げていく。

「何かコツがあるのかい？」

「こう待って、来たらザバーってやるんだよ！」

「ザバー、ねえ」

何度か挑戦するが、なかなか上手くない。手が大きい分、俺のほうが有利なはずなんだがなあ。

「よく見てて！」

9は水面とじつとにらめっこをし始める。そして手を音もなくスツと入れ、そしてザバーと一気にすくい上げた。

「ほらー！二匹だよ！」

「すごいな！俺も……」

さらに集中する。9のようににらめっこをして、小魚の動きを追いかける。

「違うよお兄ちゃん」

手を入れようとして俺を、9が止める。

「追いかけてやだめだよ。逃げちゃうから」

「違うのかい？」

「あつちが油断して近づいてきたところをだよ！」

「なるほどな」

ちょうど、小魚が一匹近寄ってきた。深く考えずに俺は水に手を浸け、素早く上げた。

「お兄ちゃんやったね！」

「ああ……案外すんなり取れるもんだ」

掬った水の中で、小魚が暴れまわっている。そっと川に戻してやると、慌てるように岩の隙間へと逃げ込んでいった。

「家族のもとに帰ったのかな？」

「さあ、どうだろうね」

「……、私たちも45姉のところに戻る？」

9が川からあがろうとしたときだった。踏ん張るために足に乗せた岩には、苔が大量にくっついていた。

「あつ」

気の抜けた声をあげながら、9の身体が傾いた。

「あつぶねえ！」

腰を両手でがっしりつかんで、転ぶ前になんとか支える。

「大丈夫!?!怪我はない!?!」

「うん！ありがと！」

手足をぶらぶらさせながら、9は笑ってくれた。無事なようだ。

「イタッ」

「ん？」

「なんか足が痛い……」

「ちよつとみせてごらん」

川岸の大きな岩に座らせて、足を見せてもらおう。転びこそしなかったもののすべった際に擦りむいたのだろう。血が滲んでいた。

「ちよつと待っててね」

「うん……」

シャツを破いてペットボトルの水を染み込ませる。その切れ端で傷口を拭くと、しみるのか痛そうな声を上げる。

「大丈夫。ただの擦り傷だ」

「お兄ちゃんごめんなさい」

「謝る必要なんてないさ。さてと……」

擦り傷ではあるけれど、範囲が広い。荷物に入れておいた絆創膏は小さすぎる。

俺はシャツをさらに破って、傷口を抑えるように結びつけた。

「これでよし。帰ったらちゃんと消毒しようね」

「うん！ありがと！」

歩きづらいただろうからと9の前にしゃがみ込むと、すぐに意図を察してくれて背中の中のしかかってくる。

「おんぶだー！」

「あまり動くと落ちちやうよ」

「やだやだ！落とさないで〜！」

少しオーバーリアクションをしながらがっしりと捕まってくる。

怪我の痛みは忘れてくれたようだ。

「9……？」

「おんぶ……」

「……お兄さん？」

荷物のところへ戻った時に、なんというか複雑そうな表情で迎え入

れられたのは、何故だろうか。

第25話 寿司食いてえ

これは川遊びから数日後のある晩の話……

あつ、なんかすごく寿司食べたい。

「というわけで寿司を食べに行こうと思う」

「どういうわけなの……」

チビたちが眠ったあと、俺とG11ちゃんが出かける場所の相談をしていた。

何故寿司を食べたくなかったかって？それは寿司を食べたくなかったからだよ。

「回転寿司とか？」

「いや……回らないほうがいいな。せつかくの夏なんだから」

「そう……それじゃあ」

そう言つてG11ちゃんは一つの市場のサイトを開く。

「こんなところあるんだけど、どう？」

そこは、プラスチックのパックに自分の好きなお寿司を取つていて会計するという、これまた珍しい場所だった。

「うくん、控えめに言つて最高じゃないか！」

「あわわ、お兄さん急に抱きつかないで！」

「よし行こう！明日行こう！すぐ行こう！」

「あわわわわ」

ちよつと強く抱きつきすぎたのか、G11ちゃんがぐるぐると目を回しながら顔を赤らめているけど関係ない。喜べ、明日は寿司だ。

その後、このテンションのままめちやくちやスケジュールを決めて、そのまま泥のように眠った。お酒にプラスで深夜テンションまでかかると何をしでかすかわからないものだ。

||*||*||*||*||

「うおお、想像以上だな」

電車とバスを乗り継いで来た先は、意外と大きな建物だった。海のすぐ側だから濃厚な潮の香りが辺りを包んでいる。

「よし、じゃあ行こうか」

「うんー」

想定通り人が多い。はぐれないようにG11ちゃんと分担しながら、中へと入る。随分と広い空間のはずだが、店と人混みのせいで随分と狭く感じる。

「おっと9ちゃん、少し待って」

辺りを見回して、ちょうど空中廊下のようになった二階部分を指差す。

「他のみんなも。まずははぐれないこと。そしてもしはぐれたらあそこの柱で待つこと。わかった?」

「はーい!」

迷子案内という便利なものはあっても、念の為の決め事だけは大切だ。といっても、いつものごとく危うく蹴りそうなくらい近くから離れない45ちゃんと9ちゃんのはぐれそうにないけれど。それに416ちゃんは今日も今日とてG11ちゃんと手をつないでいる。

「それじゃ、いざ出陣」

「おー!」

9ちゃんの元気な返事とともに、俺たちは市場の中へと繰り出していった。

||*||*||*||*||

人混みの中は、思った以上に通りづらかった。せっかく取った寿司を落とさぬようにしながら、会計を済ませる。

「9ちゃん、それは?」

「えつと……軍艦巻き!」

「ずいぶんとたくさん種類があつたもんだねえ……」

9ちゃんの持つ器には、軍艦巻きものが所狭しと並んでいる。いくらやうに、それに海苔ではなくサーモン自体でシヤリを包んだものま

である。

「お兄ちゃんは……なにそれ？」

「これ？うなぎだよ。今年の夏はまだ食べてなかったなと思つてね」
「そつちじゃなくてこつち」

「どうやら9ちゃんにはバレバレだったようだ。」

「ビール？」

「まあそうとも言う……でもノンアルコールだからさー！」

「いいんだけど、あとで私たちもなにか飲みたいなー」

「わかつたわかつた。外に自販機もあつたし皆でなにか買おうか」

「やつたー！」

「そういえば45ちゃんは何？」

「45姉ならあつちの店に行つてるよ」

9ちゃんの指差す方向を見れば、うさぎのポーチからお金を取り出している45ちゃんがいた。そしてお金を出した後、店員さんにペコリと礼をしてからこちらに戻ってきた。

「何を買ったの？」

「えつと……これ」

そういつて45ちゃんが手に持つビニール袋を広げる。その器は俺たちのような四角いものではなく、円形だ。

「ほう、海鮮丼とはいいいちヨイスだね」

「その……お店の人がすごくおすすめしてて美味しそうだったから」

ちらりと店の方を見ると、他店には負けないくらい声を張り上げて客を呼び込んでいる。こういつた店と店との距離が狭いからこそ、こつちも呼び込みの声が収まらないのだろう。

「お兄さんもいい買い物したみたい」

「ははは、45ちゃんもお見通しか」

45ちゃんはコツンと俺のポケットの中の缶を叩いて、それからいつものように服を掴む。

「G11ちゃんたちと合流しなきゃね」

「その必要はないよ」

「つと、もう来てたんだね」

「まあね。私はあまり食べないし、416ちゃんもすぐに決めて買ってたよ」

2人とも悩むと思っていたが、速攻で決めてきたようだ。

「ちなみに何を買ったんだい？」

「私はおすすめされたのを」

G11ちゃんの器には、人気ランキングの上から数個が並んでいる。

「私は美味しそうだったのを……」

416ちゃんの分は、これまたわかりやすく、値段が高かったものが並んでいる。多量が多い気もするが、あまり表に出てないだけではしゃいでいるのかもしれない。

「よし、じゃあ食べる場所を探そうか」

といっても、この人混みだ。そうそうに席が見つかるわけがなかった。

「どこも埋まってるなあ」

ただでさえ席が限られているのに、俺たちが5人もいるということもあって全然見つからない。

「あお兄ちゃん！あっちなんてどうかな！」

「ん？」

9ちゃんの指差す方向を見れば、それは市場の外だった。海に伸びたデッキの上の植え込みが、ちょうどベンチ代わりになっている。

その一角が、ちょうど日陰になっており、なおかつ空いている。

「よし、じゃああそこにしようか」

さて、念願の寿司、実食と行こうじゃないか。

第26話 泳ぐ寿司

豪華な寿司と、それを入れる質素な器。自販機で買った緑茶に、青空の下。また特徴的な状況で俺たちは座り込んでいた。日陰の場所を確保できたからか、そこまで暑さも気にならない。

「おいしい〜」

9ちゃんが頬を膨らませながら、お寿司を夢中になって食べている。他の3人も、口にこそでないが顔をほころばせながら箸を動かしている。

カシュツ

銀色に光る缶を、勢いよく開ける。辛口な喉越しが寿司を運ぶ手を助ける。旨い。回転寿司なんかでは考えられないくらいの暴力的な大きさのネタが、舌を蹂躪してくる。

「くーっ、たまらないね」

「お兄さん、随分と楽しそうだね」

「食べたいときに食べたいものを食べる。これ以上に楽しいことがあるかい？」

「こんなにテンションが高いお兄さん初めて見た……」

G11ちゃんが何かつぶやくが、気にせず次は寿司へと箸をのばす。意外と多めに買ったつもりだったが、あつという間に器を空にしてみました。

「ねえお兄ちゃん」

「なんだい、9ちゃん」

「私、おかわりしたい」

「偶然だねえ、俺もだ」

くいくい、と服の裾を引つ張られる。その引つ張ってきた45ちゃんの方を見れば、どうやら彼女もまた、物足りなかつたようだ。416ちゃんやG11ちゃんも同様。となればとる選択肢は一つだ。

「よしーじゃあもう一回、買いに行こうかー」

そういつて俺たちは、再び市場へと舞い戻った。

||*||*||*||*||

第二陣を終えた俺たちは、膨れた腹をさすりながら近くの神社を観光してみることにした。食後の運動にはちょうどいい距離だった。

「えつと……お兄さん」

「ん？なんだい45ちゃん」

「これ……」

そういつて45ちゃんは、ウサギのポーチから単行本のようなものを取り出す。

「ああ、御朱印か。いいよ、行こうか」

45ちゃんはコクリとうなずいて、それから俺の手を握って受付のほうへと引つ張っていく。45ちゃんがこうやって引つ張るなんて珍しい。

「あつ45姉！私も！」

そういつて空いているもう片方の手を9ちゃんが掴んでくる。まともや両手に姉妹を装備した俺は、犬に引きずられるソリのように引きずられかけながら受付へと向かうことになった。

「ねえお兄ちゃん、見てみて！」

45ちゃんが受付の人に御朱印帳を渡している間、9ちゃんがすぐ側のお守りコーナーを指差す。

「これは……フグの形をしたお守り？珍しいね」

「なんだか有名なんだって。ねえ買ってもいい？」

「いいよ。どうせだから皆の分も買おうか」

ちようど5種類あるようだ。色と、それから効果も違うらしい。

「お兄ちゃん、おみくじもあるよ！」

「いいね、45ちゃんが帰ってきたら皆で引こうか」

このあとむちやくちやおみくじを引いた。結果？そつと閉じて結んだとだけ……。

||*||*||*||*||

「このあと、どうしようか」

昼の混雑を避けるために早めに到着したため、まだティータイムにも早いくらいだった。帰りの電車を調べていると、G11ちゃんが袖を引っ張ってくる。

「お兄さん、あそこ見て」

「ん？水族館か」

「どうやら、市場のすぐ側に水族館があるらしい。

「でも最近行っただろう？」

「でも水族館ごとに展示は違うし、何より……」

「気温が上がってきて暑いんだね……」

G11ちゃんはコクリとうなずいた。

「どう？皆は水族館いきたい？」

「私は行きたい！」

「9が言うなら私も……」

「皆が行くなら」

まあ大体想定通りの言葉だ。確かに日差しが辛くなってきたところだ。涼しいであろう水族館で時間を潰すのはいい案かもしれない。

「よし、じゃあ行ってみようか」

いつも先に調べていくから、こうやって事前情報無しは初めてだ。なんとなくわくわくしてきた。

「楽しそうだねお兄ちゃん！」

「まあね。ほら、早く行こう！」

||*||*||*||*||

水族館の中は、案の定冷房が聞いていた。水音や壁の視覚効果も相まって、涼むには最適な空間である。

「つと、団体客もいるのか。はぐれないようにね」

「は〜い〜」

近くの幼稚園か何かの団体客とかぶってしまったらしい。小さい子どもがたくさんいる。はぐれないように、45ちゃんと9ちゃん

に、必ず2人で行動するように口を酸っぱく言い聞かせる。

2人は仲良く手をつなぎながら、キョロキョロとしながら歩いていく。俺も少し後ろを歩きながら、張り巡らされた水槽に目を向ける。

水族館一つ一つでコンセプトが違う。前に行ったところは自然を使用した展示がメインだったが、今回の水族館はいくつもの中規模な水槽で魅せるタイプだ。一つ一つの水槽に入っている魚が少ないので、じっくりと魚の種類が見やすい。

だがしかし……立地上の問題が一つ。

「なあなあ、俺がおかしいのかな」

たまたま隣にいた大学生くらいの男が、彼のとなりの友達に話しかけている。

「泳いでる魚、旨そうに見えるんだ」

そう、市場のすぐ隣という性質上、俺たちの他にも寿司を食べたあとにここに来た客が多いのだ。先程まで口に運んでいた旨い魚が元気に泳いでいる姿を眺めるのは、すこし正気度が削れそうな状況な気がした。

第27話 ありがとう

メインとなっていていろいろらしい大きな水槽の前には、数組分のソファが設置されていた。

水槽に釘付けな子どもたちを見守りながら、俺はソファに腰掛ける。落ち着いてみると縦にも横にも大きな水槽だ。

「ふう……」

館内は快適そのもので、薄暗いのもあつてくつろいでいると寝てしまいそうだ。

「お兄さん」

「G11ちゃんも休憩？」

G11ちゃんも俺の隣に腰掛ける。

「疲れちゃったので」

ペットボトルを開けながらそういうG11ちゃんも、どうやら若干眠たいらしい。

「このまま……」

水槽とそれから子どもたちを眺めていると、G11ちゃんが突然ポツリとつぶやいた。

「このままっ……」

「あついや……その、このままずっと続けばいいのになつて」

「俺もそう思うよ」

本心だった。親元を離れて一人暮らしだった。そんな人肌離れた夏休みを過ごしていたのだ。だから皆といるなところに出かけるこの日々は、俺にとつても続いてほしいものだった。

しかし、何事にも終わりというものが存在する。夏休みというものは終わるものなのだ。

「また、皆でいろんなところに行きたいな」

「そうだね」

同意の声を聞きながら、俺はソファから立ち上がった。荷物を持ち直して子どもたちの方に戻る。

「あつお兄ちゃん！先に行ってもいい？」

まだ水槽に食いついている45ちゃんと416ちゃんと違い、9ちゃんは先に進みたいようだった。何か目当てのものがあろうようにもあつた。

「待って、俺も行くよ」

先に行こうと手を引く9ちゃんをなだめつつ、G11ちゃんに目配せする。どうやら伝わったようで、肩をすくめつつも了承してくれた。

「それで、9ちゃんは何を見たいの？」

「えっバレてた？」

そりやもちろん。45ちゃんのことを置いて自分だけ先に行こうとするあたりがいつもと違う。

「えつとね……これ！」

そういつてパンフレットを開き指差したのは……

「ああ、そういうことか」

水生生物とのふれあいコーナーだった。

||*||*||*||*||

なるほど9ちゃんが2人を呼ばないわけだ。

「うわあーぶよぶよしてるー！」

ヒトデだとかそんな触れ合える動物を、とつたどーと言わんばかりに持ち上げているのは天真爛漫な笑みを浮かべた9ちゃんである。

「見てみてお兄ちゃん」

「ん、なんだい？」

「かめー！」

甲羅をガツシリと掴まれた亀は、ジタバタと手足を動かしていた。

「かわいそうだから離してやりなさい」

「はーい」

亀を置いてから、9ちゃんは手を洗いに行く。しかしその手についた匂いはとれなかつたらしく、確認するかのように何度も自分の手の匂いを嗅いでいた。

「もう満足したのかい？」

「うん。45姉たちと合流しよー！」

今回は手をつないでこようとしないまま、45ちゃんの方へと走っていかうとする。

「走ると危ないよー！」

「はーい」

ピタツと足を止めて、それから急かすように早く早くとびよこびよこしている。

「よし、行こうか」

「……、うんー！」

追いついた俺は手を差し出す。9ちゃんはしばらく悩んだ後、その手を握り返してきた。

大丈夫。変な匂いがうつったら洗えばいいだけさ。

なお、そのあとに合流した3人から距離をとられたのは解せぬ。

「それよりほら、あつちにイルカがいるんだってよー！」

「イルカ!？」

「あつちあつち！早く行こ、45姉！」

「あつふたりとも待つて〜」

G11ちゃんが9ちゃんと45ちゃんを追いかけていく中、俺の服の裾を掴んだ416ちゃんがぐいぐいと引っ張ってくる。

「どうしたんだい、416ちゃん」

「えっと、その」

なんとなく言葉を決めかねているようだった。

「楽しかったかい？」

416ちゃんは無言で、コクリとうなずいた。

「また、どこかに行こうか」

また、コクリとうなずいた。

「優しいのね」

「言われなれてるよ」

お世辞としてが大半だけどな。

「また、水族館にいける？」

「今度はいつ行けるかな」

「……」

「冬休み……は俺が厳しいかもな。春なら時間がいっぱいあるんだけど……416ちゃんたちの学校がどうかかな」

「……」

「まあ、俺は時間が有り余ってるから、普通の土日でも行けるかもね」
だから……

「だからそんな悲しそうにするんじゃないよ」

「そう……ね」

俺は少しうつむいている416ちゃんを撫でようとして、自分の手が磯臭かったことに気がつく。しばらく迷ったがしかし、抵抗する様子もないので俺は頭を撫でた。目を細めて静かに撫でられる様子はまるで猫だ。

「よし、皆に追いつかなきゃ」

「……っこ」

「ん？なんだい？」

「だっこ……」

「……」

「ダメならいい」

「わかったわかった！ほら、おんぶでいいかい!？」

416ちゃんがこういうことを言うのが珍しすぎて、ついつい固まってしまった。しゃがんでやると、すぐに後ろに回って、背中に小さな体重を感じる。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

それだけいうと、416ちゃんは静かになった。どうやら、寝てしまったらしい。

「お疲れ様、いつもありがとう」

いつも家事をしてくれる小さな彼女に、俺も感謝の言葉を返した。

第28話 早めのおやすみ

背中では寝てしまっていた416ちゃんも、イルカのショーが始まる前には起きて、全員で見ることができた。

いつものように、9ちゃんのはしやぎながら、45ちゃんは黙ったまま食い入るように、416ちゃんは冷静そうに興味津々にイルカのショーを見ていた。

終わったのは、すっかり日暮れの時刻。海辺にある水族館が、夕焼けで赤く染まっていた。

「ねえお兄ちゃん見て！記念パネルだって！」

よくある写真スポットである。場所の名前と日付、それから顔をはめるパネルとがポツンと置かれている。

「写真撮ろ！ね？」

9ちゃんの一言で写真を撮ることにした。写真を撮ってくれそうな親切な人を探しつつ、俺はスマホをスリープモードから解除する。

「つと……マジか」

「どうしたんですか、お兄さん」

「いや、充電切れだ」

もう随分と酷使してきたから、寿命なのかもしれないな。とりあえずG11ちゃんので撮ってもらってから、後で送ってもらおう。

「お兄ちゃん！撮ってくれるって〜！」

「わかった。今行く」

スマホをポケットにしまって、パネルの方へと行く。顔をいれる穴には、身長の問題で俺と、それから本人の熱い要望で9ちゃんがつくことにした。

「行きますよー。はい、チーズ」

パシャリとカメラの音がする。夕日の位置のせいで俺だけ変な写りになったが、これはこれで面白いのでヨシとする。

「じゃあ、帰ろっか」

「うん！」

元気なのは9ちゃんくらいで、あとは少し眠そうな顔をしていた。

無理もない。朝からこれだけ動いて、美味しいものをたらふく食べたんだ。帰りは少し遠くからタクシーで帰ろうと思いつつ、電車の時間を調べようとしてスマホを取り出す。

「お兄さん？」

「あ、そうだった」

416ちゃんに変な目で見られながらスマホをしまう。

「G11ちゃん、電車の時間調べてくれないかな。俺のスマホは今はただの文鎮だからさ」

「う……うん。えつと……ここをこうやって……えつと」

「違う、貸して」

「ああ416ちゃん」

「ここをこう……そしてこう。ほら」

「ありがとう。お兄さん、えつと次は3分後」

「うんうん、なるほどな」

3分後、3分後かあ……。駅まで歩いて行って3分……

「無理だね。さらに次で」

「次はそのさらに15分後」

「ちなみにその次は？」

「夜までだいたい15分間隔であるみたい」

「よし、じゃあのんびりして行ってもいいな。せつかくだし、お土産なんかどうかどうだい？」

「えっいいのー！」

「まあ、なかなかここまで来ないからね」

「やったあ！45姉！早く選ばー！」

「9、もう引つ張らないで。ついて行くから」

「ああもう……待ってよ二人とも」

二人を追いかけてG11ちゃんが行ってしまい、その場にぽつんと416ちゃんを残されてしまった。

「416ちゃんは行かなくていいのかい？」

「私はもう……これがあるから」

そう言っただけで見せてくれたのは、416ちゃんのスマホに映る先程の

写真だ。

「いつのまに送ってもらったの……?」

「さつき、お姉さんのスマホを借りた時」

とんでもない早技である。

しかしせっかく皆がお土産を選んでいるんだし、このままではもつたいたない。

「じゃあ、家に帰ってから皆で食べるお菓子を買わないか?」

「……うん、わかったわ」

子供なんだからもう少し我儘を言ってもいいのにと思いながら、俺はその後の買い物中に416ちゃんが目を奪われていたスノーボードムをカゴに入れた。

※※※※※※※※※※

「ただいま〜!」

「ふう、ようやく帰ってこれたな」

地味に時間がかかるので、夜中に帰ってきたとはいえ仮眠はバツチリである。

「お兄ちゃん!ゲームしよ、ゲーム!」

「まあ待て待て。まずは風呂に入ってからにしよう」

仮眠は取ったと言えど、目に見えない所に疲労は溜まっているものだ。十中八九寝落ちするだろう。というか俺でも怪しい。

「あつ私、着替えとってくる」

「私も」

G11ちゃんと416ちゃんはそれぞれの部屋に帰っていく。

「じゃあ先にお風呂はいつてくるね。行く、45姉!」

「うん。あ、お兄さんは入ってきちゃダメだよ?」

「入らねえよ」

三人も入ったら湯船が溢れるわ。

「冗談だよ」

「言われなくてもわかっとなるわい!」

クスクスと笑いやがって。45ちゃんの今後の成長が心配である。さて、無事風呂に行った二人のことは置いておいて、とりあえず遠出の後片付けをしよう。おっとそういうえばスマホの充電が切れてい
るんだった。

俺は布団脇の充電コードを引つ張ってきてつなぐ。画面がつくま
では少し時間がかかりそうだ。

ああ、魔力に抗えない。この少しの時間だけでも横になりたいとい
う欲が抑えきれようか。いや、抑えきれないわけがない！

寝転がった俺の意識が途切れるまで、それほど時間はかからなかつ
た。

第29話 知らないもの

夢を見ていた。

あつたかい、幸せな夢だ。

思えば、随分と冷たくて寂しいところにいた気がする。

沈んでいく。明るい陽の光が届く水面から、どんどんと深く冷たい底へと沈んでいく。

違う、沈んでいつているのではなくて、戻っているのだ。元いた場所へ。

沈む感覚に反して、意識は浮上していく。だんだんと手足の感覚が戻ってきて、音が聞こえてくる。

||*||*||*||*||

「……！先生！」

「奇跡みたいだ」

目覚めて最初に聞こえてきたのは、聞き覚えのない声だった。

「親御さんに連絡を」

「はい！」

若い女性の声でそう返事が聞こえる。いまいち現状がつかめない。ゆっくりと目を開けば、眩しい光と共に白い天井が視界に映る。保健室かと思っただが、もう高校は卒業したんだった。

「ここは……いつたい」

体を少し起こして見回せば、なるほど納得、病院の個室だった。

「あんた起きたんね！」

「母さん!？」

ぱちぱちと瞬きをしていれば、母親が病室に駆け込んでくる。

「良かった……本当に……」

「いつたい何が……」

もういつぶりだかわからない母親の体温に、なんだか安堵感を覚える。

「覚えとらんと?」

「うん……これっぽっちも」

医者の方を向けば、ふむと顎をさすっている。

「記憶障害でしょう。事故のショックを忘れようとする自発的なものなのでじきに治るか」と

「いや待って、事故?」

いつの間に俺は事故にあったんだ?

「あんたが旅行から帰るときの電車よ」

ああそうだ。たしかに俺は寿司が食べたくなつて一人で遠くまで出かけて……

そう、一人で帰っている途中に……

「ごめん、やっぱ上手く思い出せないわ」

「急がんでよかと。ゆっくり落ち着いたら思い出せばよかだけやけん」

「ああ……。そういえば今日は何日?」

「4月1日」

4月……?でも最後に記憶があるのは俺の夏休みの最後……つまり9月だ。

「つまりは俺って半年近く寝てたわけ?」

そんなことを言うと、母親は渋い顔をした。

「今は200x年よ」

「……はい?」

なんだ。とどのつまりは事故に遭って数年植物状態でしたってか?

ああ、くそっ!何か引つかかるのに思い出せねえ。

「ってことは大学とかは」

「もちろん退学してるわ」

「デスヨネー」

やっべ。てことは俺、職なし学なしニートまっしぐらか。あーちく

しよう、このまま入院してはいたくなかったぜ。

このあとめちやくちやりハビリさせられて即退院した。

※※※※※※※※※※

数年後、何の因果か知らないが俺は元バイト先に拾われるようになって入社し、なんだかんだで社会人生活を満喫していた。

なんともまあ人手不足なもので、数年で支店長まで上り詰めてしまった俺は、今日も閑古鳥のなく店内を監視カメラで眺めつつ頬杖をついていた。

「すみませーん、郵便です」

「あいよー」

玄関の方から声が聞こえた。

珍しい。いや、郵便が来ること自体は珍しく無いのだが、今日は配達員が女性だ。いつもはチャライ感じの若い男なのに。

「ここにハンコをお願いしまーす」

「あつ事務所に置いてきちまった。サインでいいかな」

「もちろんでーす」

どこかで聞いたことあるような気がすると思いつつ、俺は書類にサインする。

「ん？荷物は？」

よくよく見てみれば、配達員の女の子は書類の留まったバインダーを持つのみである。

「荷物？私の目の前にあるわ」

「は？」

次の瞬間、目の前から大きな音がする。それは4WDの大型車のエンジン音に近い。

まさかと思ったが最後、何も無いと思っていた空間から車が現れる。噂に聞いていた光学迷彩をこの目で見られて感動である。

「さて、抵抗しないでもらいたいんだけど」

そう言つて、目の前の少女はその大きなジャケットの下から銃を取り出す。

UMPシリーズ、ストレートマガジン、サイレンサーのおまけ付き。「来てくれるよね、お兄さん？」

「……、まったく。たまには旅に出るのもいいかな」

俺は渋々と車に乗り込む。車の中では、これまたどこかで見たことがあるかも知れない顔ぶれが揃っていた。

「騙されやすい癖はどうにかしたほうがいいかもね、お兄ちゃん」
「肝に銘じておくよ」

車が走り出す。目的地は、俺は知らない。知らないけど、たまにはサブライズ旅行もいい気分転換になるだろう。俺は代わりに叱られるであろうエリアマネージャーにだけ詫びメールを送り、その携帯を投げ捨てた。

この日、街のデータバンクから一人の男のデータが消えた。彼もまた、存在しない人物へと変わってしまった。

しかしこの世の中でそんな些細な事件に注目する人などいない。

第30話 特別編 まったく……

「おーっし、じゃあ2時間後まで頼むぜ」

「ああ、上手くやれよ?」

俺はそう言つて男友達と別れる。今日はサークルの活動日だが、それ以上に価値がある日だ。なんと、俺の大親友が今日告るらしい。そのセットアップをすべく、今日まで準備してきた。あとは二人きりにしていい雰囲気になったところで親友が突貫するのみである。

「後輩どもは少し離れたスポットに行つてゐるみたいだし、俺はどうするかな」

ふらふらと表通りを歩いていけば、ふと目に止まるものがあつた。

「ここは……喫茶店か?」

古めかしくも和洋の入り混じつた外装は、まるで大正ロマンとでも言うかのように俺の目を惹きつけてやまなかつた。直感的に、この店に何かがあるように感じる。

カランカラン

「いらっしやいませ」

その喫茶店に入った瞬間。俺の人生は色づき始めた。

||*||*||*||*||

「少し休憩が長いんじゃないか?」

「うーん、といつてもお客さんいないしなあ」

「まあ、確かにそうだがな」

我らがバイトリーダーのダネル先輩は、そう言いながらも掃除の手を止めることはなかつた。かく言う俺は焙煎機のメンテナンスである。手が豆臭くて敵わん。

こうして二人で働いているのもわけがある。といつても、俺とダネル先輩がバイト中で、店主は買い出し中なだけである。

ダネル先輩はその長い髪を高い位置でポニーテールにしており、先ほどから目の端にチラチラと入っては俺の目を惹きつけている。

「どうだ、直せそうか？」

「うわっ！急に近づくなよ」

あービックリした。何とか距離感バグってないですかパイセン。突然すぐ近くに顔が来たから思わず後ろに倒れるところだった。くそっ顔がいいなちくしょう。

ああそうだ、正直に言おう。俺はダネル先輩に惚れている。一目惚れ二目惚れ何回見てもドキツとする。わざわざ遠いここまでバイトしに来ているのも、そのためだ。

「ところで次の休みはいつからなんだ？」

「えっと、テストが来週で終わりかな」

「……なるほど」

まさか一緒に出かけたなりなんて……

と考えた俺がバカであった。

「じゃあ来週からはさらにシフトが増やせるな」

「ええ……。先輩はどうなんですか」

「同じ学年なんだから先輩はやめてくれと言っているだろう」

「いやー癖になっちまってね」

「はあ、まあいい。私もシフトを増やすさ。君が来ないならその分さらに多く——」

「来ます」

「えっ」

「同じぐらい頑張つてシフト入ります」

「あ、ああわかった。随分とやる気があるんだな。欲しいものでもあるのか」

さすがにここであなたの心ですだなんて返す度胸はなかった。

||**||**||**||**||

「おい、最近付き合い悪いじゃねえか」

「ん、ああすまん。バイトで疲れててな」

「まったく大丈夫かよ」

最後のテストを終えた俺は、無事リア充の仲間入りをした親友に絡まれていた。

「ま、たまには呑みに行こうぜ。実はな……合コンの誘いが来てんだ」
「なん……だと……？」

「ククク、聞いたところによると今日はバイトはないんだろ？息抜きだよ息抜き」

「待て、お前彼女はどうする気だ？」

「なに、心配するな。彼女も参加予定だ」

「す、既にできているカップルを合コンに……まさか首謀者は！」

「ああ、俺と彼女を体の良い人数合わせに使おうとしてやがる」

「なるほど、お前が俺を誘った理由がわかったぜ」

「ククク、俺はサポートにしか回れねえけどよ。お前ならば壊せる筈だ」

「ああ、任せろ。必ずや討ち取ってみせる」

俺と親友は固い握手をし、数時間後に待ち合わせ場所で再会することを誓ったのであった。

計画は破綻した。繰り返し。計画は破綻した。

俺たちの浅はかな目論見は看破されており、合コンの首謀者は必殺技を早々に繰り出してきやがった。

「王様ゲーム！」

「ちくしょうやってやらあ！」

引いたくじは3番、親友に合図を送るも首を横に振られる。ちっ王様は外したか。

「じゃあ3番の人が1番の人に『愛してる』って10回言うで」

定番の王様ゲーム。それは仕組まれた罠だった。まるで決定事項かのように初手で王を引いた首謀者は、俺を狙い撃ちしてきた。

「3番は……俺だ……」

頼む。せめて相手は男だったり冗談が通じるような女子であって

くれ……

「1番は……私だな」

そう言つて1番と書かれたくじを上げたのは、室内というのに帽子すら取らない子だった。

「……ちよつとタイムで」

俺は絶望の最中にいる親友を招集する。

「今日は同じ学部の奴のみじゃねえのか？相手の子、知らねえんだけど」

「ああ。いつも目立たないところに座つてる子だよ。ほら、最初の授業とかで帽子を取りなさいとか怒られてた」

「うーん、そんな奴がいた気がしなくもないな……」

「とにかく今は耐えるしかねえ。やられんじゃねえぞ」

「もしもの時は……」

「骨くらいは拾つてやるさ」

そして俺は戦地へと赴くのであった。

「よし、じゃあ行くぞ」

「あ、ああわかった」

俺は唾を飲み込む。覚悟は決めた。相手は帽子を深くかぶつたままだし、目を合わせてすむのは不幸中の幸いだろう。

「すううううはああああ……愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる愛してる！はい！10回！」

シーンと静まり返った室内。頼む何か助け舟をと思つた親友は白目を剥いて使い物にならない。万事休すか……

「その……なんだ、照れるな」

視線も合わせてくれないその子は、そう言つて視線を下げてままたま俺から距離をとる。すつと、音もなく、一番離れた席へ。

ああ……終わつちまつたぜ俺の青春……。

その後は、本当に何事もなく、そして熱烈な告白をした（させられた）俺は皆から距離を置かれつつ、合コンはエンドロールを迎えた。

お持ち帰りコースやタクシー直帰を決める者たちの中で、俺と親友

はトボトボと歩いて帰るのであった。負け犬はクールに去るぜ。泣く気力すらもなくしてな。

||*||*||*||*||

「てなことがあったんだよ。まったくこれだから大学生は」

「自分も大学生だろうに」

先日のことをダネル先輩に話してみれば、呆れたと言わんばかりにため息をつかれる。

「しかしなんだ、いい親友を持ったな」

「……紹介しないぞ？彼女持ちだし」

「いやそういうことじゃないさ。ただ仲が良い同級生がいるのが羨ましくてな」

意外だ。きつとこんなに美人な先輩のことだから、友達もたくさんいるものだと思っていた。

「意外だと思っっているみたいだな」

「顔に出てたか？」

「ああ、ハツキリとな」

ポーカーフエイスには自身があるんだけどなあ。

「まあ、面倒ごとになりかねないからな。普段はあまり人と関わらないようにしている」

「じゃあ先輩にとって俺は特別な存在なわけだ」

「ふふ、そういう言い方をされては誤解されてしまうぞ」

そうクスクスと笑う先輩の顔は、今まで見たことがないくらいに可愛らしかった。

「もし誤解されてもいいと言ったら？」

「ははっそれは……さすがに照れてしまうな」

そんなことを言うものだから、その後のバイトに身が入らなかった俺をどうか許してほしい。

||*||*||*||*||

バイトの帰り道。先輩よりも早く店を出た俺は急いで来た道に戻っていた。どうやら定期券を落としたようなのだ。ついでにあわよくば、先輩の帰り道に突き合わせてもらおうという魂胆である。いや、定期券を落としたのは本当に故意じゃないんだがな？

しかし、目の前の障害物A及びBによって俺の足は止まった。いや、止めざるを得なかった。

「おいおいその姉ちゃん」

「暇？今から呑みに行くんだけどさ？一緒にどうよ」

障害物A及びBが女の子の行手を遮っていたのである。なんともまあ迷惑な行のだが、問題はそこではない。普段は俺も無視するようになりと日常茶飯事な出来事である。しかし、今回は相手が相手だった。

「いや、困るのだが」

相手は、合コンで俺が熱烈な言葉を繰り返したあの女子であった。今回も深く帽子をかぶって、服装も夜の闇に溶け込んでしまいそうである。

「まったく、仕方ねえか。見ちまったもんはもんだし。

「すまん、待たせて。おらなんだおめえら。人の彼女にたかんな」

二人組ナンパやろうがしつこくなくて助かった。去り際に舌打ちをしたくらいである。一発二発くらいはくらう覚悟をしていたので正直ほっとしている。

「はあ。あんたも気をつけろよ。目立たない格好で夜道を一人なんてさ」

「ああ、ありがとう。助かったよ」

「まったく。今日は厄日かな」

定期はなくすし、変な現場に居合わせちゃうし。

「ああそう言えば」

女の子はそういつてかばんをゴソゴソとする。

「これ、忘れて帰っていたらどう？」

なんとまあ驚くことに、かばんから出てきたのは俺の定期券ケース

だった。

「なっこれをどこで？」

「いや、普通に店だが」

「店……？」

今日はバイト先にまっすぐ向かったからどこの店にも立ち寄っていないはずだが……

「ああ、なるほどな。まさかとは思ったが」

そういつてその帽子を脱ぐ。まとめられて収まっていた長い髪が、ぶわりと広がる。

「まさか私だって気がついてなかったのか」

帽子の少女は、ダネル先輩だった。

「えっあっ……はっ？えっ？」

「まったく。普通気がつくだろう。格好は違っても声は一緒だぞ」

腕を組みながらダネル先輩は言葉を続ける。

「それに君とシフトが合致したり長期休みが同じ日程だったり、気がつく要素はたくさんあっただろう」

「あっえっ……？」

「まったく、君の目は節穴か？」

ぐいっと寄ってくるダネル先輩に、思わず後ずさりをする。

やばい、すごい恥ずかしくなってきた。つまり俺はダネル先輩にむかってアイシテルだなんて連呼したわけだ。うわぁマジか。

「どうした。帰らないのか？」

「あ、えっと、その……」

「まったく。そこまで動揺しなくてもいいだろう」

「いやぁ……そうそう！俺用事思い出したんで帰りますね！定期券ありがとうー！」

そういつて定期券を奪い取ろうとすると、ヒョイと避けられる。

「いや、あのお……ダネル先輩？」

「なに、君曰く私は夜道を一人で歩かないほうがいいんだらう？」

「うぐっ……」

「ほら、電車の時間もあるしそろそろ駅に向かわないか？」

「……ハイ」

俺に拒否権は、初めから無かったのだ。

※※※※※※※※※※

「ねえダネルちゃん」

「彼氏、どうやって落としたの?」

「よくあんな鉄壁を落としたよねえ」

普段はあまり喋らない私だが、少なからず交友というものは存在する。そんな数少ない友人たちが、昼休みに私を取り囲む。

「彼ってばいくらアピールしても避けるし」

「男友達は多いのに女に対しては絶対一歩引いてるよね」

私がいなくても会話が成立しそうだなと気配を消して逃げようとするが、ガシリと腕を掴まれる。

「おーっと逃げようとしたって無駄よ?」

「私でなく彼に聞いたらどうだ?」

売るような真似をしてすまないと思いつつ、彼に後を託して私は離脱することにする。

「あらあらあら、彼氏を売るような真似が許されると思いませんか?」

そういつてポイツと無造作に投げ捨てられたのは、彼の衣服だった。

「彼なら今、男子たちに拷問を受けている最中ですよ」

「なん……だと……?」

「観念することね」

まったく、こんな風に面倒に巻き込まれるから嫌だったんだと思いながら、私は質問という名目の拷問を受けたのであった。